

報 特 攻

平成14年8月

第52号

〒105-0001 東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090
FAX 03(3432)5567

編集人 田中賢一
発行人 木村元正

目次

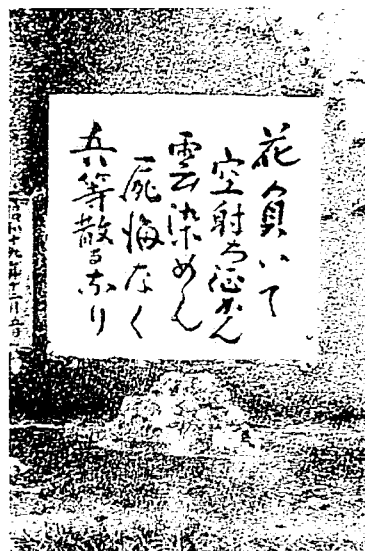
靖国神社みたま祭	1
靖国神社御祭神の御心	2
沖繩に散った特操一期の戦友②	5
殉国沖繩学徒顕彰祭に参加	15
「金武鎮魂碑」建立の由来	18
都城特攻慰霊祭遺族の挨拶	19
特攻隊員に敬虔な祈り	20
死の恐怖が断ち切れた日	21
沖繩巡洋記事	23
(投稿者氏名と頁を掲げる)	
皆本義博 23	田中賢一 24
本間嘉男 34	ヒックマン加代子 36
臼田智子 38	深川巖 39
木村元正 40	菅原道熙 41
菅原道熙 41	穴山正司 42
総目録 (42〜51号)	42

靖国神社恒例の「みたま祭り」は今年も七月十三日から十六日の間行はれた。我が会の会員金文男さん献納の懸け雪洞に書かれた歌に、私(田中賢一)は感慨深いものがある。

レイテに降下した挺進第三聯隊は南サンフェルナンドの精糖工場を宿舎にしていた。19年12月6日レイテ降下の為宿舎を出た後、壁にこの歌が書きのこされていた。降下編成に漏れた毛利衛生兵が、これを写し取って戦後私に告げた。毛利君も故人となつてしまい、仮名使いなどこの通りかどうか判らない。

この時レイテに降下した者に一人の生還者もない。私は初め第二挺進団司令部の部員に内定していたので、この聯隊を空母隼鷹に乗せ佐世保から送り出す仕事をしたが、挺進練習部内の人事配置の都合上、私は挺進戦車隊長に補せられ、替わつて楠本少佐が部員になった。この人はレイテで戦死した。レイテに降下した第三聯隊の将校の殆んどは面識がある。時々詠者は誰かと思ひ巡らすことがある。

我々の基地だった宮崎県川南町の護国神社裏庭に「空挺落下傘部隊発祥之地」という碑がある。その台座にもこの歌が刻まれているので、歌詞だけは後世に伝るが、この経緯はやがて消えてしまうのは致し方ない。



この碑の台に右の歌が刻んである

空挺落下傘部隊発祥之地



靖国神社御祭神の御心

—靖国神社に替る戦没者慰霊施設を
作することに断乎反対する—

戦死したら靖国神社に祀られる、肉
体は滅びても魂は靖国神社に帰るのだ
と信じて逝った。靖国神社こそ戦死者
の魂の籠っている処であるのに、拜む
ために別の所に何かを建てようという
考えを抱く者がいる。拜むという格好
だけを世に示そうとするのか。動機が
不純、思想の欠如ここに極まる。

英霊の靖国神社に対する思いがどの
ようなものであったかを偲ぶため、こ
こに特攻隊員の遺書遺詠や日記の幾つ
かを掲げてみる。書残されたものは特
攻隊員に限ったことではないが、死を
目前に見詰めた者の言葉がより真実で
あったと思う。人の将に死なんとする
や其の言や善し(論語泰伯篇)という
が、そこには何の虚飾も誇張もない。

陸軍軍曹 瀬谷隆茂

仙台航空機乗員養成所出身 20才
第四三三振武隊
20年5月26日 万世出撃沖繩へ
御両親様

御元氣にて食糧増産に専念の事と存

じます。隆茂御蔭様に
て愈々元氣相成明後日
は愈々出撃する予定で
す。ここは我等の最後

の基地九州川辺郡の知覧(ちらん)です。内地の
山や川、田や畠何一つとして懐しいも
のばかりです。

此れらの山や川を見るにつけ家を出
た時の事があれやこれやと走馬燈の如
く思ひ出されます。一度思ひを戦局に
馳せば何が何んでも我々の行かねばな
らぬ秋(あき)です。

皇国に生を享け、皇国護持の為に清
く散る若桜、何と嬉しい現在の心境で
せう。血湧き肉躍る、日本男児の本懐
之に過ぐるなし。御両親様どうか喜ん
でやって下さい。

(注) このあと五月十八日夕方、知覧
より万世に転進。
同二十六日万世より出撃。
思えば長き二十年我儂ばかりにて何
等孝養も成し得ず遺憾の極みです。

しかし、隆茂もどうやらこうやら一
人前の軍人として戦の庭に散れるので
す。隆茂が沖繩の海に玉と砕けたとお
聞き召された時は一言「隆茂よくやっ
た」とほめてやって下さい。「七度生
まれ醜敵を亡さん」とは正に我々の願
うこときつと／＼やります。最後に隆

茂として御両親様に対し何等孝養を成

し得なかつた事を幾重にもくお詫び
申し上げます。
御両親様どうか何時までもくお元
氣にて皇国の為に御健闘下さい。

では靖国で会う日を楽しみに隆茂は
征きます。

辞世

大君の御楯となりて散らん身の
水づく屍とわれ悔ゆるなし
君が為捧げしのちいまぞ今
醜艦撃ちて玉と砕けん
昭和二十年五月十八日 隆茂

海軍少尉 植村眞久

第十三期飛行予備学生 26才
第一神風特別攻撃隊大和隊
19年10月26日 比島セブ基地出撃
(愛児に遺した手紙)

素子は私の顔をよく見て笑いましたよ。
私の腕の中で眠りもしましたし又御風呂
に一緒に入った事もありました。

素子が大きくなって私のことが知り
たいときは、お前のお母さんか佳世子
叔母様に私のことを良く御聞きなさい。
私の写真帳も御前の為に家に残して在
ります。

素子と言う名前は私が付けたのです。

素直な心のやさしい思いやりの深い
人になる様にと思つて、御父様が考え
たのです。(略)

私は御前が大きくなって、立派な花
嫁さんになって、幸になるまで見届け
たいのですが、若し御前に私を見知ら
ぬままにしてしまつても決して悲しん
ではなりません。御前が大きくなって
父に会ひたいときは九段(註・靖国神
社のこと)へいらつしやい。そして心
に深く念ずれば必ず御父様の顔がお前
の心の中に浮かびますよ。

父は御前は幸せ者と思ひます。
生まれながら父に生写しだし、他の
人々も素子ちゃんを見ると眞久さんに
会つて居る様な気がすると良く申され
て居た。又御前の御祖父様御祖母様は
御前を唯一つの希望にして御前を御可
愛がり下さるし、姉様も又御自分の全
生涯をかけてただただ素子の幸せをの
み念じて生き抜いて下さるのです。必
ず私に万一の事あるも親無犯などと思つ
てはなりません。父は常に素子の身辺
を護つて居ります。先に言つた如く素
直な人に可愛がられるやさしい人になつ
て下さい。

お前が大きくなって私のことを考え
始めた時に、此の便りを読んでもらひ
なさい。

昭和十九年〇月吉日

父

陸軍曹長 佐藤新平

仙台北航空機乗員養成所出身 23才
第七九振撃隊

(留魂録と題する日記があるが、四月一日の一部)

お母さん江

思えば幼い頃から随分と心配ばかりおかけしましたね。腕白をしたり、又何時にも不平ばかり言ったり。

眼を閉じると子供の頃のこと、不思議な位ありと頭に浮んで参ります。

悪いことなどすると神様に謝らせられたり、又幼い頃「今日の良き日を守り下さい」「今日の良き日を有難うございました」と毎日拝神のことをやかましく言われたお母さんでした。

今日になり本当にあの頃からお母さんの教育がどんなにか新平の爲になつた事でしょう。病気で心配をかけた、又苦学の時も随分と心配をおかけした。

苦学と言へば、家を出発する時、台所でお母さんが涙を流されたのが、東京にいる間中頭に焼きついて、あの頃どんなにかかえりたかつた事かしれませんでした。

お母さんの本当の有難味が解つたの

は東京へ出てからでした。あれから余り家に居る事もなく、ゆっくりお母さんに親孝行をする機会がなかつた事だけ残念です。

軍隊に入ってお母さんにお会いしたのは三度ですね。一度は去年の休暇、

二度目は去年の暮近く館林まで来ていただいた時、あの時は新平嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

態々長い旅をリュックサックを背負つて会いに来て下さつたお母さんを見、

何か言ふと涙が出そうで、遂、わざわざ来なくても良かったのに等と口では反対の事を言つて了つたりして申し訳ありませんでした。

あの時お母さんと東京を歩いた想い出は、極楽へ行つてからも、楽しいなつかしい思い出となることでしょう。

あの大きな鳥居のあつた靖国神社へ今度新平が祀られるのですよ……手をつないでお参りましたね。今度休暇でかえつた時も、お母さんは飛んで

迎へて下さりましたね。去年の時もそうでした。

海軍少尉 時任正明

第十三期飛行予備学生 25才
第一章 遠征

20年4月6日 第二国分出撃沖繩へ

遺書

本日突然国分に進出、明日を期して出撃します。名古屋より転出の途中、

本城の上を高度二千米にて通過しました。感無量でした。敵來襲の頻化と皇國の防衛に二十五年の運命を賭して立派に武士の子として戦つて来ます。

今更に残し置くべき事ありません。唯、慈愛深く御両親に今日迄、正明何等恩報するの事なく唯々残念に思ひ居ります。二十五歳の今日迄何不自由無く今此の光榮ある攻撃隊の中堅将校として参加し得るの目を得さしめ下されし御両親他皆々様の御養育限りなく身に沁みます。

明日の出撃は勿論生還を期し得られませんが、然し心中誠に静かなるものがあります。

正明は皇國防衛の前堤として莞爾と散つて行きます。

國分農学校の当直室に此の書を進めつつも、本城の家に帰っている様な気がします。今夜の星は又、特に美しく御両親の面影が目前にちらつきます。

桜花爛漫と咲き薫る南国を飛び立つ

て小生の故郷鹿兒島を出撃の第一線に為し得たる事は何にも代え難く喜しき事です。

正明 桜花咲く靖国の社、智三人の兄上の許に、そして親友松本峯一の居る所に一足先に征きます。

御両親様の悲しみは小生にとつても苦しい事です。正明は満足です。今日は一時頃到着しましたが、業務多繁、遂に連絡する暇がありませんでした。お許し下さい。

父上にも母上にも現下、日本の現状に既に覚悟ある事と思ひます。日本は皇國です。絶対不滅です。

我々は此の信念の下に生きて来ました。人類の正義の道を示すものは皇國の道にあると思ひます。書けば果しく思へば尽くる事ありません。

身を潔め心を静めて明日は南海に散ります。父様、母様、末永く御身御大切に。

小生と共に散る人は、兵学校出身高橋中尉です。縁あらば宜敷くお願い致します。

荷物は後の分は名古屋空第一士官次室海軍少尉厚地兼之助氏か、川野良介氏に頼んで置きました。連絡して見て下さい。

遺髪とも云う可きものは残しません。

帽子、短剣を正明と思つて居て下さい。

桜花爛漫と咲き薫る南国を飛び立つ

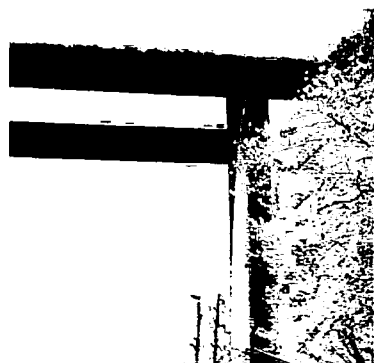


部隊名 神風特別攻撃隊草薙隊海軍少尉 時任 止明

(四月五日夜国分基地国分農学校の一室にて書かれたものです。)



御遺族の思い



国民の姿

陸軍軍曹 若尾達夫

海軍少尉 島 澄夫

古河航空機乗員養成所出身

第十四期飛行予備学生出身

第四三二振武隊

第三八幡護皇隊

20年5月26日 万世出撃沖繩へ

20年4月16日 第二国分出撃沖繩へ

遺書(弟宛のもの)

達夫・広昭

(同隊松本久成伍長に宛てた手紙、二人は同じ隊で同じ日に出撃しているが、その前に別れていた時があったのだから。松本伍長の遺品中から発見された)

松本兄 君とは古河、仙台、平安鎮

の社で首をながくして待つてるぞ

といつも一緒だったね。愈々待望の特

二人はただ与へられたる現実を 真

攻隊に召されて、これも亦死を共にする

実を以て貫いてゆけばいいのだ

同じ隊とは……。思へば山あり河ありの

下らぬ批判を一切やめて

幾星霜、一緒に散らう、そして靖国で

真正面からぶつかるといふのだ 門はたたか

また一緒にならう

なければ開かれない 最後の最後まで

花でさへ 潔よく散る若桜

真実の門をたたきつつけるのだ。

大和男の子の俺達が

かくしてこそ 自らのゆくべき道は

御国のために散るのなら

明らかに如何なる困難にも泰然たりう

何の桜に負けやうぞ

る

日の本の男に生れ光栄は

戦争は益々困難を加える事だろ

死して屍は帰らずも

然し如何なる事態に立至らうと しま

魂永久に靖国の

理し 大衆を導いてゆくそこに有識者

護りの神と我ならん

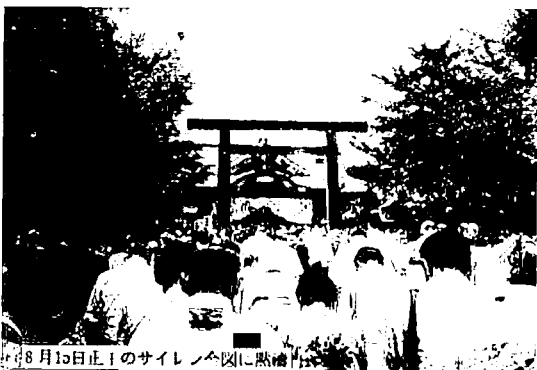
たるの真意義があるのだ

陸軍軍曹 若尾達夫

どうか父上母上をもちたてて 我れ

この記事と同じ内容の小冊子が
あるので、有効に配布する目途の
ある人は事務局にお申し出下さい

なき後をしっかりとらぬ
では元気で征ってくるぞ
必ず轟沈だ



昨年の8月15日の参拝者は12万5千人



みたま祭 今年の献灯は大小合せて2万7千余

沖繩に散ったある特操一期生の戦友②

田淵 鷹夫

あの苛烈な大戦末期にベンを操縦桿にかえて奮闘し祖國のために散華された数多い同期生のためにも、吾等の闘いのあとは埋没されてはならないと思います。

学鷲の先輩として特操一期の後輩四機を沖繩上空まで誘導し夕闇迫る慶良間湾上の米艦船に見事突入に成功させた、飛行二十六戦隊付坂本隆茂中尉がいた。

坂本中尉が、この特攻攻撃のすべてを詳細に記録された「沖繩特攻」の一文ほど私の心を打ったものはありません。読むうちに、万感胸に迫り、涙に文字がかすむのも度々でした。同期の四名の凄絶なまでの戦いを知り、そこに真の学鷲、特操一期生の姿を見た思いがしました。

坂本さんは復員後、あらゆる手づるを求めて四人の遺族を探しあて、それぞれの遺族を訪問し、見事な最期を伝えるとともに墓前に額ずかれたとのことです。編集委員会と坂本さんのご厚意によりこの一文を掲載していただくことになりました。心から感謝いたします。

なお散華された戦友は次の四名です。

誠第二十六戦隊 昭和20年5月17日慶良間東方

稲葉 久光殿 今野 静殿

白石 忠夫殿 辻 俊作殿 合掌

坂本隆茂氏は神戸商業大学在学中は学生航空連盟に所属され、昭和16年12月繰上げ卒業、第七期操縦候補生として軍籍に入り飛行二十六戦隊に所属しニューギニア、フィリピンを転戦、台湾花蓮港において終戦を迎えられました。

編者注 この記事は特操一期生史に掲載されたものを小川武氏が投稿せられたもので、前半分は前号に掲載してある。

沖繩特攻続

坂本 隆茂

九死に一生

台湾に背を向けた時から、私は直ちに風向風速を観測して針路修正角度を決定する作業に専念した。飛行機は風の全量流されるという大原則がある。

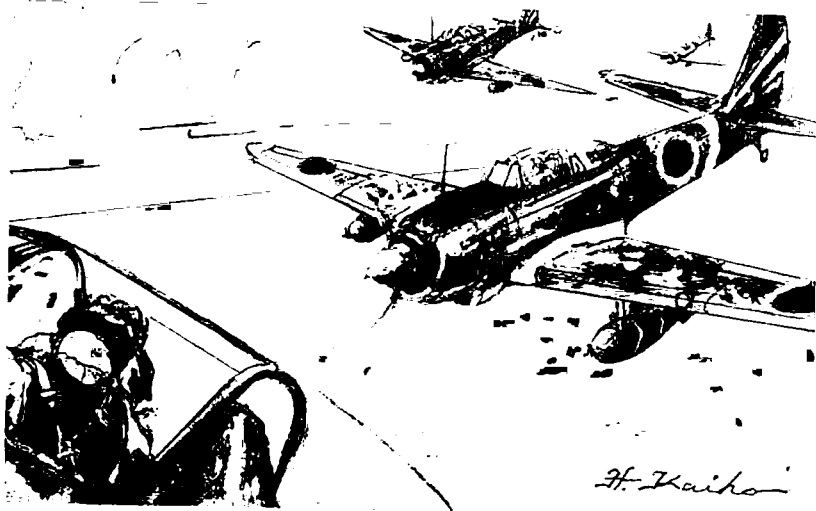
二時間以上も横風を受ければ、目的地とはずいぶん離れた方向へいってしまふ。そのために風向風速を測定して針路を修正して飛ばねばならぬ。

高度を高く飛行している今のうちに観測しておかなければ、超低空になってからは測量不能である。海上のこととて、私は海面の白い波頭を凝視しつつ、慎重に幾度も納得のゆくまで、くり返し測定した。

沖繩までこの方位を維持していかねばならぬ大事

な根元である。

特攻機は正しく編隊を組んで、調子は悪くなさそうである。あと二時間と少々を四つの生命が、私を取り巻いているのだ。つい先程、四番機が宜蘭の街を見つめていた姿で憶い出した。



少飛会海法画

最期のちやめつ氣

ふと我に返って四番機をのぞいた。

ああ、今日彼は神になる。彼は満足しているのかもしれない。それでいいの、いや誤りであろうか、私には到底解けぬ人生観である。

さあれ、ふるさとに、我子の無事を祈る母なる人に思いを馳せて、胸がしめつけられて来た。

彼の視線がピタリと合うと、こっくりうなずいた。私も激励をこめて、二、三度強く頭をふってやった。

何を考えているのだろう。もの云えぬ悲しさ、お互いの意志は僅か十数メートルの空間をスレ違っているのだ。

南方はるか水平線近くに灰色にかすんで見えるのは与那国島であろう。

台湾をふり返ればまだ山のいただきが連なって水平線上に長々とうかんでいた。

あと二〇分もすればいよいよ超低空にうつるのだ。二番機の辻が何か座席でこそこそやっている。何か異常があるのかな。

いつもの理知的な青白い表情がそれ程変っていないようだから、別に気にする程のものもあるまいが、普段からともすれば思いつめているような気配の感じられた彼のことだ。安心はならない。

座席のポケットに手を入れているようだ。何かとりだして、もそもそやりはじめた。

少々気懸りになり出したが突然その正体が分った。大きなバナナをむいていたのだ。

私の方へ二、三度見せびらかすと、さも美味そうにもぐもぐやり出した。

食料の積込みとは恐れ入ったが、きつと戦友の饒けであろう。

「おい一本よこせ」と手を出してふざけた私に、白い歯を見せて、

「ここまでおいで」をやって見せた。

それにしても何と心にくい振舞だろう。おや、全機が次々にやり出した。彼等はきつと申し合せていたにちがいない。

編隊長の私だけが指をくわえているではないか。うっとろしかつた私の心が、この小さな事件のおかげで余程明るくなった。

彼等の片手がお留守になっている間は、編隊の隊形も間のびがしたり、いびつになったりしていたが、やがて満足したらしく、再びもとの態勢にもどった。

せんりつの巨岩

さあ高度を下げる時刻がやって来た。

エンジンを絞らずに機首を下げ、徐々に降下することにした。高度計の針はゆっくり回転をはじめ、速度はぐんぐん増加して機体が少しずつ震動し出した。

海面に白い波が見えるのはかなり荒れている証拠である。一〇〇メートル、八〇〇メートル、五〇〇メートル、

連続して編隊降下がつついて、大きな波のうねりが次第にクロス・アップしてくる。

気流も悪くなって時折機体が大きくガクンと震動

するようになった。

高度二〇〇メートルを切る頃、突如異様な形相をした大きな岩が左前方より接近してきた。

もう陸地は、沖繩まで絶対に見えないと観念してただけに、無用とばかりしまっていた航空地図をあわてて取出してよく見れば、なるほど小さな点が印刷してある。直径一〇〇メートル、高さ五〇メートルもあろうかピラミッドの如く海面にそそり立つて、鋭く上がった幾つかのピークが奇怪な趣を呈している。

平地はおろか、草一本もないが、汀には飛行機の破片が至る所に散乱している。

ああ、これが噂に聞いていたラレイ岩か。

攻撃の帰途、傷ついた友軍機が薬をつかむ気持で時折ここに不時着し、誰にも知られぬまま何人とな

く餓死したらしい。

鬼気迫るこの岩も瞬間に後方に飛び去った。もう石垣島も遙か南方に過ぎた筈だ。

編隊はいよいよ海面スレスレまで降下してしま

た。

To be or Not to be

今日出発前、私が彼等と作戦を打ち合せた際に、

特に超低空飛行時の指示を厳守するようくれぐれも要求していた。それは、「海面超低空は高度感に錯覚を起し易く、機体を海面にぶっつける危険が甚だ

多い。

誘導機である俺は、高度五メートルを基準として飛行する。各機は絶対に誘導機より下がってはいけ

ない。

もし俺より低く飛んだ瞬間、おだぶつになるぞ」これだけは彼等に守ってもらいたかったのである。私の機体は波頭をかすめて飛んでいる。スピード感が強烈で目がくらみそうだ。僅かでも気分のゆるみが出れば万事終りである。

高度と方向の維持に全神経を緊張させていくうちにそろそろ敵哨戒機の警戒空域に進入してきて、上空索敵までやらねばならぬ破目になった。

顔を動かして索敵などやっているとでも超低空は維持できない。又、こんな低い位置で敵と遭遇しても、戦闘どころかそれ迄だ。無謀かもしれないが、私は思い切って索敵はやめることにした。

アメリカのレーダーが、果して参謀の注文通り超低空をキヤッチ出来ないのだろうか、然し案外そうかもしれない。

敵機に捕捉されても逃げかかれる雲一つない快晴であるからには、せめてレーダーから逃げるために命ぜられた通り超低空に全精力を集中した方がまだましかもしれないのだ。

機体は気流にあおられて大きくゆれている、ヒヤリとして機首を立て直す。波しぶきが何回となく風防ガラスに飛散してくる。特攻機は私の注文通り稍々高目に飛んでいるから先ず心配はあるまい。

特攻機の航統距離から考えて、台湾引返し可能ギリギリの時刻が迫って来た。私がこのまま回れ右をすれば、彼等は生きて還れるのだ。エンジン不調など事故理由はつけようと思えば何とでもつけられる。私一人が責任を負えばいい。

いっそのこと、ここから還ろうか、この若い生命

は救われる。そして私迄も……。

彼等は特攻要員の命令を受けて以来、連日内心の苦闘を経て来て一日一日が死より苦しい試練であった筈だ。今引返せば又苦悩をつづけさせることになる。このまま死なせた方が生への悩みを少なくしてやる思いやりというものではなからうか。いや生命は尊い。如何なることがあっても生命はかりそめにも奪うべきものではない。

帰るが是か、進むが是か。私の心は錯乱した。あれこれ思案しているうちに、とうとう運命の時刻が去ってしまった。いや、まだ近くの石垣島不時着場へは引返せる。

彼等には着陸困難な飛行機であっても胴体着陸を命ずればよい。安全装置さえはずれなければ爆弾は炸裂しない筈だ。命令に背いて彼等の生命を救うかどうかの決心を行う時間はまだ残っている。

緊張又緊張の連続、私の体力も気力も可成り消耗して来たことに気付いた。まだ二時間しか飛んでいないのに、腰の筋肉がおかしくなってきた。身動きの出来ないいきゅうくつな座席では、背伸び一つ出来ない。頭迄が少しかすんで来たようだ。

あと一時間航程の自信がぐらつき出して、目標を目前にして参ってしまう予感に襲われた。石垣島へ引返したい誘惑が頭を擡げて来る毎に、これを打ち消し乍ら、心はふらふらになって飛び続けてゆくのであった。

私の心の闘いは、彼等には勿論判らう筈はなかった。愈々迫ってくる突入にのみ専念しているのである。時間は刻一刻と過ぎ去っていく。

ホソを固めて

遂に最後の生還可能な限界時刻に達したが、まだ私の心は狂っていた。思い切って彼等の一人一人の顔から何かを読みとるつもりで、風防ガラスをあけてふり返った。

そこに眺められた光景は、私の苦悩を一度に吹きとばした。

彼等は申し合わせたように、一斉に風防ガラスをあけっぱなしにして、飛行帽をぬいでいるではないか。

額にキリッとした日の丸の鉢巻姿である……真剣勝負の構えである。

三番機の稲葉は二〇になっただろうか。赤いほつべたをして愛くるしい、桃太郎そっくり。一同決意が漲っている。

判ったよ。君達やってくれるのか。そうか、私だけがびくびくしていたのだ。背中をドンと叩かれたようなショックを受けた。私自身が助かりたいばかりに迷っていたのだ。

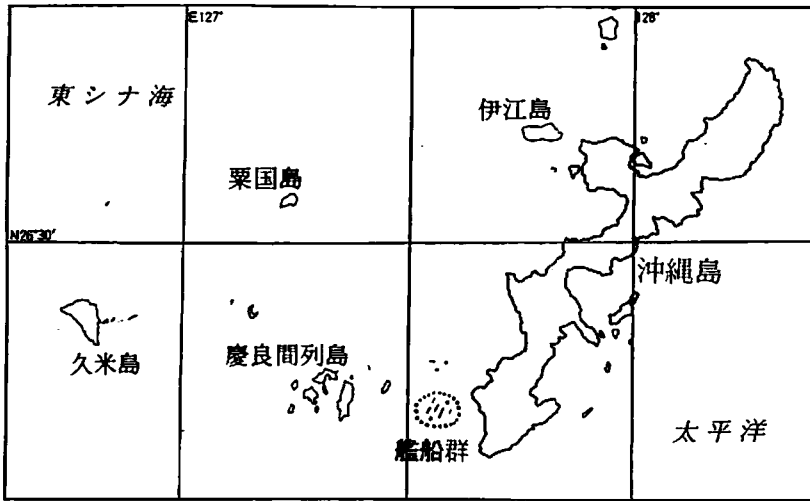
よろしい。私も決心がついた。行こう。いや、引っぱって行くよ。

出発前の宿舎で最後の食事を一緒にしたことが思い出された。料理番が精魂こめてこしらえてくれた御馳走は、長いこと口にしたことのない握り寿司であった。彼等はおいしそうにパクついた。

食事をしながら私の心を看破したらしく、彼等は言ってくれた。

「僕等は突っ込むだけです、貴方は大変ですね。生きて長い道中を還らねばならぬのですから、お察

沖繩特攻



「死ににゆく人から逆に慰められた私は、返す言葉を知らなかった。
太陽は西に傾いて、快晴の空も漸く一面の夕焼けに照り映えた。とうとうここ迄哨戒機に喰いつかれなかったのは、何と僥倖だったことか。大体此の辺で今迄の特攻機の大半はやられてしまっているが、

しします。くれぐれも自重して下さい」
「死ににゆく人から逆に慰められた私は、返す言葉を知らなかった。
太陽は西に傾いて、快晴の空も漸く一面の夕焼けに照り映えた。とうとうここ迄哨戒機に喰いつかれなかったのは、何と僥倖だったことか。大体此の辺で今迄の特攻機の大半はやられてしまっているが、

前上方の空を見渡したところ、全然哨戒している気配がない。
或いはこのまま発見されずにゆけるのではあるまいか。まだレーダーにも捕捉されていないらしい。超低空一時間半、もう体はくたくたになってしまっ

て、ただ手足だけが機械的に操縦している。陽は水平線に没し、空はまだ明るさを残しているが海は次第に紺青の濃度を増して来た。海面よりの高さの判定が次第に困難になりつつある。羅針盤だけでも二時間も飛んだ。あと三〇分で沖繩の筈だが、水平線上まだ何も見えない。果たして針路は誤っていなかったろうか。
僅かに方向のズレがあっても、カラカラになりかけている特攻機の燃料では、目標迄導くことが出来なくなる。まだか。まだ見えぬか。

焦慮と不安。自分の針路に対して自信を失いかけたが、今から方向を変えてもはじまらない。次第に暮れゆく空に追っかけられながら、目を皿のようにして前方を凝視した。体力も気力も限度に来てしまった。

Good Byell!

どれだけ時間が経ったろうか。疲れきった眼にぼんやりと、暮れゆく大海原のはるか彼方に、どうやら島影らしきものを認めた。
もうこの時の私の意識は錯乱の一步手前であった。私の航法は誤っていないかったのだ!

ぐんぐん近づく島は次第に左前方に大きく浮び上がってくる。これぞ久米島だ。四国の屋島台地とそっ

くりの形をしている。特攻隊員の表情が引き締まってきた。
久米島の稍々右手に慶良間列島が散見される筈だが、夕暮のため視界が狭小となってはつきりしない。上空に哨戒機なしと見た。

彼等もよくぞここ迄無事に来てくれた。鉢巻の日の丸が鮮やかに見え、襟に巻いた白いマフラーがはたはたとゆれている。久米島を真下に見て、突入五分前と判断した。
空の明るさは幸いにも特攻にお詠え向きの薄暮となつて、彼等は今やおそしと私の攻撃命令を待ち受けている。疲労困憊の極にあった私の体はいつのまにか生れ変わったように緊張していた。今や一刻の猶予も許されない。

愈々攻撃開始だ。
特攻隊員は連日練習して来た突入方法を実行するのみ、彼等はきつと立派な体当りを敢行してくれるにちがいない。
「安全装置をはずせ」私の信号で全機一斉に座席の引金を引いた。真鍮の破片がハラハラと落ちて黒い海面に消えた。爆弾は今や起爆状態である。
「さようなら」「さようなら」
彼等の一人一人と手を振り合つて、最後の別れを惜しんだ。

躊躇なく最後の命令を発して私は急激に機体を前後左右に振った。各機一斉に私から離脱した。
間隔五〇〇メートル、一列横体に展開して、彼等はエンジン全力回転をあげながら、ぐんぐん沖繩目指して高度を上げて突進した。

「攻撃！」
躊躇なく最後の命令を発して私は急激に機体を前後左右に振った。各機一斉に私から離脱した。
間隔五〇〇メートル、一列横体に展開して、彼等はエンジン全力回転をあげながら、ぐんぐん沖繩目指して高度を上げて突進した。

慶良間列島は夕闇に浮んで、その背後に地上重死闘の地、沖繩本島が横たわって視界に入ってきた。遂に目的地到着！ 目指す敵艦船や如何にと目をこらす。いるわ、いるわ。幾百隻とも知れない艦隊船団が、黒いゴマを撒いたように浮んでいた。ぐっと体が引き締って二、二度身震いした。

すさまじい砲火

時。正に19時30分。既にして予定した突入時刻となった。

沖繩上空は次第に暗さを増して、戦果確認のためには一分一秒を争う時間である。今や予定に遅れること数分にして、激しい攻防戦が展開されんとしているのだ。

私から離脱した特攻機四機は、五〇〇メートルの間隔に開いて、真一文字の横隊で全力上昇してゆく。少なくとも一〇〇〇メートルの高度から急降下しなければ、所望の突入スピードが得られないからだ。彼等は今やガソリンの最後の一滴まで使い果しているにちがいない。

私は特攻機のはぼ中央一〇〇〇メートル後方から追隨していった。次第に高度を上げる。黒ゴマの如く跳められたアメリカ艦船群は、漸次拡大し、豆粒程になってその全貌を露呈してきた。戦場上空は敵機の哨戒さえ見えず、無気味な沈黙である。まさかわれわれが超低空で忍びよるとは、予期していなかったのかも知れない。敵側の油断かとすれば今頃、われわれの機影を認めて、急速戦闘配備に大わらわることだろう。ここまで無疵で進出出来たことは大成

功だった。

私も戦闘準備だ。真下に吊り下げてある落下タンクのガソリンが空になった。燃料コックを翼内タンクに切替え、落下タンクを捨てるため落下スイッチを押す。しまった。落ちない。翼の下は目視出来ないが、座席のランプが青にならん以上は、くっついてはいるはずだった。こんな図体の大きいものをぶら下げて、とても身軽な空中戦は出来ぬではないか。この期に及んでこんな不手際をひき起こすとは！ おんぼろ予備機に乗ってきたあたりだ。

次は機関砲の試射をやる。ド………連続十数発威勢よく空中にぶっ放す。曳光弾がきれいな尾をひいて消えていった。刻一刻。急速に目標は接近して来る。あと四キロメートル。まだ敵の照空灯が斉射しない。アメリカ軍の対空砲火の凄まじさは、すでにニューギニア、フィリピンの戦闘で経験済みである。身の毛もよだつような、物すごい弾幕を賞悟せねばならぬのだ。

目前の四機は高度をとり終って水平飛行に移った。暮れゆく海面に、灰色をして浮ぶ艦船の数々、よくもこれだけの物量があったものだ。空母は見あたらずに戦艦、巡洋艦をはじめ大小無数の艦船が慶良間列島と沖繩の間の海上にひしめき合っている様は誠に壯観。これを攻撃するは、僅か四機、悲壮という外はない。

の周囲は猛烈なる対空砲火の弾幕に包まれてしまった。赤、青、紫色あらゆる色の炸裂が、小さな機体をたちまちにして取巻く。数百の船舶の何千という火砲からたった四機に対して、必至に打ち上げる防衛砲火である。瞬間見とれてしまった。とにかく物凄いの……一語に尽きる。

今までの戦場ではとてもこんなひどい砲火には、お目にかからなかった。私の体験では、照空灯の光芒の中でドカドカ射たれたものだが、ここでは照空灯なしで、射ちまくってくる。それにしても一カ所に集中する御手並は、実に見事である。

あまりの華麗さに目がくらんで、小さな特攻機の機体は見えなくなった。薄暗い大空の四カ所に、大きな花火の集団が浮んでいるようであった。

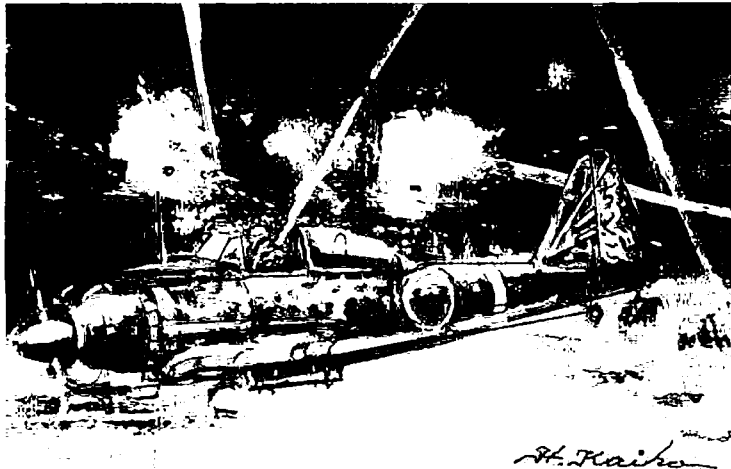
早く突入せねば、このまま撃墜されてしまうぞ、やきもきするこちらの気持も無頓着の如く彼等は所望の距離まで接近しようとしてか、悠々直進しているらしい。それは、対空砲火の花火集団が同じ高さで移動していくので、それと知れた。

早く早く、心で励ましている途端、ドカドカドカーン、私の機体は大揺れに震動して、あたり一面は大きな炸裂につつまれてしまった。目もあけられぬまぶしさである。バンバンと音を立てて被弾の破片が、機体にはね返ってゆく。一瞬私は急降下と急反転をつげざまにうって弾幕離脱を試みていた。それ以上接近しては、すぐ叩き落されそうな予感がした。数秒の後機体の周囲はもとの暗さにもどって、離脱は成功していた。折角の高度が落ちてしまった。

急旋回して再び沖繩上空を眺めると……しまった。花火のかたまりが、三つしかない！ 右から二番

ああ、無情

突如、戦闘の火ぶたは切って落された。前方四機



H. Kaito

少飛会海法画

目が欠けている！ 申し訳ないことをした。

この一機の最期を確認せず、無駄死させた。取返しのつかぬ悔恨の念に締めつけられる。

チラと時計を見た。19時35分。

残りの三機はまだ水平飛行の模様。目をあざむく火花が空中の三カ所に集中している。

ここまで健在であるのは、よくよくの奇蹟といえない。

私は、敵の射程ストレスを飛びながら、ハラハラして見守るのみ。

もう突入せねば、全部やられると思った瞬間——一機が火だるまになった。左から二番目である。大きな火焰が落ちてゆく。間もなく空中分解して黒い海面に吸い込まれるように消えていった。残るは二機のみ。

二つの対空砲火は、依然として一〇〇〇メートル上空で炸裂をつづけていたが、やがて下方に移動を始めたと思うと、次第に速度を増して、海面に近づいてゆく。

あっ。二機とも突入だ！ 暗くなつて機体は見えないが、必死に射ち上げる砲火が、その所在を示してくれた。息を殺して海面を注視、もう戦艦か、巡洋艦かの判別も困難となった。

一秒。一秒。いよいよ海面。如何。一艦の舷側で大爆発！

相次いで他の一艦に！ やった、やった。見事にやっつけた。

その閃光は紫がかったのだが、この大きな炸裂も瞬間に消えた。期待していた火炎は起きなかつたが、相当の被害であることは間違いない。

孤独の帰還

立派な突入りぶりである。

沖繩上空からあらゆる光が消えて、もとの静寂にもどった。戦艦か巡洋艦か轟沈か大破か。この距離ではとても判らない。確認するため思い切って接近することにした。

二隻ともかなり大きな艦種であることは、漸く識別されたが、敵に与えた損害の程度が判らない。舷

側に命中しているならばもう沈みかけているはずだ。もう一押しを進んだ。

とたんにグワーンと一斉射撃につつまれ、爆風で機体は木の葉のように揺れ、ミシミシと翼がきしむ。急速反転して漸く弾幕から離脱、やれやれと機体を眺め回したが、幸いにもまた被害はなく、エンジンも回転している。

いよいよ真暗で判然としないが、このまま帰っては英靈に相済まぬ。

帰還のガソリンが心細くなつたが、もう一度高度を上げて突入しよう。これが最期の突入と決めた。こんどは異なつた方向から高速度で接近していったがすかさず目もくらむ閃光につつまれてしまった。もう少しの辛抱だ、頑張ってみたがやはりいけない。退き時だと直感して涙を呑んで離脱した。とにかくこの物量には完全にカブトをぬぐほかにはなかつた。突撃すること三度。命中しないのは奇蹟であつたらう。

とっぴり暮れた沖繩上空に、私はただ一人取残された。完全に戦果を確認し得なかつたことを英靈に詫び、その冥福を祈りながら、割りきれぬ気持を徐ろに機首を西に向けた。

言いしれぬ孤独感がひしひしと迫ってきた。たたかいは終わった。だが私は帰還せねばならぬ。これからまた三時間の暗夜航路は考えただけでもない気持ではない。

さて無線封鎖も解除された。戦果報告をやる。花連港基地での対空無線班は、全身これを耳にして、私からの発信するピッピーを待っているにちがいない。

い。どうせこんな無線機では届かぬとは思いつつながら手持無沙汰な手を動かして操縦桿についているボタンを押してみることにした。レシーバーを耳にはめてみたが、雑音ばかりで頭が痛くなる。すぐ取りはずした。発信だけにしよう。

まず私自身の略号「ち・く・ご」をくり返し打って誘導機存在を知らせた。次に戦果はどう報告するか。艦種、隻数、損害を要求されていたが、残念ながら私は艦種も損害も確認していない。仕方がない、とにかく「中型艦二隻」と発信してお茶をにごすことにした。

先方が聞いているかどうか、さっぱり頼りない。数回反復しているうちに馬鹿らしくなって止めてしまった。(基地ではこの無線をキャッチして大喜びであったそうである)

スワ敵機?

沖繩を背にして五分もするともう島かけは視界から消えて、あたりは一面の闇が忍びよってきた。落下タンクの落ちない事故がかび心をゆすった。スビードの邪魔だ、掃還のガソリンが余分に要る。思いついてスイッチを押すが、どうしても落ちない。とうとうあきらめた。

座席に灯を入れる。計器盤がきれいに照明されて幾分落ち着きを与えてくれた。

まだ敵機の哨戒圏内だから油断はできぬ。電探射撃をする米機と暗夜の空中戦など御免蒙りたい。とにかく一刻も早く戦場から遠ざかることだ。

ピュッ、ピュッと火箭が機体をかすめた。来たな、

やっぱり敵機に攻撃をかけられた。ぐいっと操縦桿を引いて急旋回、ふり向いても暗くて敵機がみえぬ。またまた曳光が飛んできた、一体敵は何機だろう。なんとかしてこの射弾から離脱せねばやられる。失速しそうな急旋回を連続して離脱を試みる。それでも身近く光が流れる。今度は力一杯方向舵をふんで、サイドスリップで射弾をそらす。相手が見えないので射つに射たれない。知っているだけの秘術をつくしてぐるぐる舞い狂う。いよいよこれでおしまいだ。それにしても機体にはカチンとも命中しない。少々おかしいと気づくと火は前方より飛んできる。ハテナ。機関砲の曳光らしくない。(落ちつけ)機首をたてなおしてよく観察することにした。判った。何のことは無い。自分のエンジンの排気管から、火の粉が飛び出しているではないか。明るい間は気がつかなかったが、暗くなってから目に映じたものだ。平常は使用せぬ予備機の排気管についてたカーボンが、灼熱されて飛び出ているのだ。とたんに吹き出した。沖繩上空で相手なしに、りきみかえってぐるぐる回りに戦闘していたわけだ。安心するより馬鹿らしさに腹が立った。使ったガソリンが惜しい。

月齢一、暗夜である。戦闘機の長距離海上航法にあっては何も見えない最も苦手な夜である。然し私には運がついていた。

快晴である。星夜は真の闇とはならず、幾分でも視界がきくのだ。目が慣れるにしたがって、一〇キロメートルほど先の島影位は、判定できそうだった。エンジンはまだ好調である。高度を二五〇〇メートルにあげた。戦場を離れて三〇分。もう敵機も追いかけてこないだろう。興奮していた心も漸く平靜に

もどった。

掃還もコンパスが頼りだが、第一の目標宮古島さえつかめばあとは西へ西へと石垣島、与那国島と飛石伝いに飛べる。そうすればいやでも大きな台湾にぶつかるところだ。大胆に飛ぶ外はないのだ。異様な光の存在が気になり出した。翼燈そっくりである。鋭くときざまされた戦場の神経は、往々にして星の光を敵機と錯覚した例が少なくない。私もニューギニアで幾度かこれに悩まされた。先ほど、てんでこ舞いの一人相撲を演じたことと思えばあわせて今度はあわてないことにした。でも見れば見るほど翼燈そっくりである。エイ星にしてしまえ。私は上空を見ないことにした。思い出したように頼りない無線を発信して気をまぎらわした。次第にねむくなっていく。

あれから一時間を経過した、下は黒々とした海また海である。気流はよくてピクとも動揺しない。一度にどっと疲れが出た。体の筋肉も関節も痛みだしてじっとしていられない。それより一番恐ろしい睡魔に襲われはじめた。いやでも臉が重くなっていく。いつの間にかうつらうつらして、はっと気を取りなおす。機体は傾き、方向もでたらめになっている。頭をたたく、膝をつねる、この戦いの苦痛はまた格別だ。

頭の中が次第に濁ってきた。異様な音! そして震動! どこか遠くから呼びもどされたように、ふと我にかえった。何か異常発生! かすんだ眼でぼんやり計器盤を見ればどれもでたらめだ。次第に正気になって驚いた。飛行機は横倒しになって海面めがけて急降下している。高度はあと五〇〇メートル

ル、危険速度を突破している。危い！思わず叫んだ。急速に操縦桿を引きあげれば機体はバラバラに分解する。三〇〇メートル、二〇〇メートル、高度は下がる。海上二五〇メートルで危うく機首が立直った。あと数秒遅かったら……冷汗がスーッと脇の下を流れた。

何分間位ねむっていたものかわからない。一度に睡気がフツ飛んだ。仕方ない。仕方ない、安全第一で行こう。高度五〇〇メートルと決めた。ガソリンを節約しながらエンジンをだましますかして、いつもの倍位の時間をかけて、漸く上昇した。ねむ気はさめたが、今度は猛烈な寒さを感じ出した。南方とはいえ五〇〇メートル上空は零度の寒さである。着ているものは熱常用の飛行服とアンダーシャツ一枚そして救命胴衣をまとっているだけ、次第に体が冷えきってきた。一難去ってまた一難だが、眠るよりこの方がましだ。

もうそろそろ宮古島の時間だと思う。だが一向にそれらしいものが見えてこない。さきほどから一人相撲や自爆しかけたりで、相当道草をくっている。それにしてももう島が見える筈だ。宮古島をはずせば台湾をつかむのおぼつかない。じりじりするうち、遙か南方海面に稍々黒ずんだ海域が望見された。さては宮古島？でも随分遠いようだし、まだ雲の影のようにも思える。思い切って変針して確認しようか、いや待て、もし島でなかったら、残り少ない燃料となつて心はいよいよ動揺するだろう。ともすればふらつきがちな心に強く断を下して、そのまま直進することにした。果して一〇分後に宮古島の上空に出てひとまず安堵した。島は灯火管制をして眠っ

たように静まりかえっている。私の爆音は米軍機の通過と思われているかもしれない。ここから針路を真西に向けた。やがて帰還行程も半ばに達する。生還の望みが少しは持てるようになった。先程からの寒さで身体がガタガタふるえ出してとまらなくなつた。おまけに涙とはなみずがとめどなく流れ出して、始末におえぬ。

安全第一主義もとうとう我を折り一〇〇〇メートルだけ値切ることにして、高度四〇〇メートルで妥協したら少しは楽になった。いかげんなものだと我ながらおかしくなつた。

第二目標は石垣島である。ここは飛行場もあるし、対空無線が待機している筈である。はじめてレシーバーと真剣に取り組んだ。呼出しをかけた、ここえた指先でダイヤルを回す。あれこれと操作するが、雑音ばかりで一向反応がない。これ以上の努力は、消耗した今の体力ではとても続かぬ。とも角対話を諦めた。

またうとうととやりはじめめる。機体が首を振り出しては、はっとして立直すこと数度。寒さと睡眠の両方が心身をさいなむ。我慢ならぬ苦しさ。先刻別れたばかりの紅顔の隊員達がチラリと目に浮かんで消えた。何の刺戟もおこらない。いよいよ私の意識も限界に近づいた。何かすることはないか。そうだ。夜食を積んでいることをすっかり忘れていた。少しも食欲はないが、私の腹は空になっているにちがいない。操縦桿を股にはさんで弁当を取り出した。のり巻がつままっている。開いただけでもういやになつた。それでも無理に冷え切つた一つをほうばって、お茶で漸く胃袋に流しこんだ。残りをじつと見つめ

ていたが急に癪にさわって機体外にほうりだしてしまつた。

遙か前方に石垣島が見えた。これで帰還行程の半ばは過ぎたことになる。ほっとすると同時にこれから一時間半をどうして持ちこたえるか、急に自信を失いかけた。ここで着陸すれば残りの苦痛はなくなる。安易の誘惑が頭を擡げた。正確な判断力を半ば喪失しかけた現在、全然未知の飛行場にしかも暗夜着陸を強行することの如何に無謀な冒険であるかを、いまだ私はわきまえていた。

されば胴体着陸。いや落下傘降下という手もある。だが今更機体を捨てるには忍びない。そんな勇氣も湧いてこなかった。

とに角上空から飛行場を詳細に観察しよう。そして自信があれば着陸敢行と決めた。いよいよ石垣島の灯が接近して来た。ぐっと高度を落して進入したが、暗夜のことである。島の状況がさっぱりつかめない。私は翼燈をつけ前照燈を照らして大きく機体を左右に振って友軍機たることの合図をしながら島の上空に達した。飛行場ではすぐにも限界燈や着陸燈を点じてくれるものと期待した。高度五〇〇メートルで島の上空を旋回し始めたが地上からは一向に反応を示さない。第一どが飛行場かさっぱり判らぬ。二回、三回、と旋回を続けたが、島は眠つたように静かである。米軍機と勘違いしているのだろうか。盛んに前照燈を点滅してみせるがやはり駄目だ。今宵沖繩から帰還の友軍機がここを通過することを、島の連中は予め連絡を受けている筈なのに——。だが、ことここにいたつてはいたしかたない。時間にして一〇分近くを消費した。着陸断念。落胆したり

憤慨したり何とも言えぬ気持でこの島を去ることにした私は、再び機首を西に高度を上げて飛びつづけなければならなかった。いつまでこの孤独は続くのか。もう高度三〇〇メートル以上に上昇する気にはなれなかった。又々貴重な一〇分を失ってガソリンが惜しまれてならぬ。それでも計器の針はどうやら花蓮港迄帰れそうな残量を示してくれていた。

何の予告もなく計器盤の照明燈がフッと消えた。いやな予感に襲われる。電気系統の断線である。エンジンは回転しているところをみると座席関係の故障らしい移動懐中電燈をさぐり出して、スイッチを入れてみるが駄目だ。唯一の頼りになる計器が見えなくなるとは致命的だ。然し有難いことには計器の目盛には蛍光塗料が塗ってあった。それにしても泣き面に蜂である。

やがて航空地図通り与那国島が見えたが、機はその北端の沖合をかすめて行く。大分南風が強くなって北方へ流されているらしい。針路を稍々南に修正する。与那国はその小さな楕円形を海上にくっきりと現わしていた。昼間なら台湾の山なみが見え始めるのである。九分通り生還の見通しがついたと思つた。

時計を見ても暗くて時間が判らない。やがて夜も10時をまわる頃だろう。難陸以来六時間、この位の飛行は何ともなかった筈の私も今日だけは徹底してこたえた。台湾が近づくとつれて天候悪化のきざしが見え始めた。今迄満点の星であったのに前方が消えはじめ水平線が判らなくなり機体の姿勢維持が困難となって来た。

開戦当初、加藤軍戦闘隊の幾多歴戦の勇士達が長

距離攻撃の帰途夜間海上の悪天候のため錯覚に陥って機位を失い、あたら仏印沖の海上に没した戦訓があるだけに、天候の悪化は今の私にとっては命取りであった。次第に雲は厚さを増して拡がってきた。雲下を飛ぶ以外にない。雲中に入れば台湾の山に激突する。高度を三〇〇メートルに下げて漸く雲下に這いこんだが、もう真っ暗である。何も識別出来ぬ、計器さえ明るく見えるなら計器飛行も出来るが、今はそれさえ不可能だ。役に立たぬと思いつつも前照燈を点じた。五〇メートル先も見えない。機体は不安定な飛行になって、酔っぱらったような足取りを始めた。操縦桿を握る手が硬直して来た。

もう台湾の筈だ。いつ山肌が飛び出してくるか判らない。雨粒が風防に当たり出したのは山際に近づいている証拠だ。目前に山が現われた瞬間急旋回をして間に合うかどうか？ 体が熱くなって額から汗が流れた。これが最後の試練だと心を励まして操縦桿を握る。少々雲が薄くなったのか、前方の視度がきき出した。これより悪くならないでくれ。突

然目に映じた山肌！ 左へ垂直旋回。助かった。見覚えのあるあの断崖、とうとう台湾に辿りついた。天候は悪くてもこの海岸線は我々の銀座だ。ぼんやり見える波打際に沿って、一路南下する。断崖が終わるころになって、夜目に白くスコールが迫って来た。終点真近になってとも迂回する気にはなれぬ。超低空で突入した。大粒の雨がパンパンと風防に当たってくだける。花蓮港のそばまで来て四苦八苦の態である。五分でこれを突破する。

なつかしい花蓮港平野。皮肉にも、幸運にも花蓮港上空は晴れである。飛行場の赤い限界燈がずらり

とならんで私の着陸を待っていてくれるではないか。スベリー着陸燈は上空を照射して私を誘導している。感激に目がうるんだ。

「在天の英霊よ。私は今還って来た。君達の勇敢な行動と功績を語り伝えることが出来るのだ。願わくは安らかに眠れ」

翼燈と前照燈を点じ、機体を大きく振って帰還の合図をしながら滑走路の真上を突っ切った。下では人影が右往左往している。場周経路をゆるやかに旋回しつつ着陸準備、車輪を出す。脚が完全に出たかどうかは見えないので、座席の背ランプと、翼の上から出る一〇センチ位の指示棒で確認する仕組みになっている。先刻よりランプは故障、棒を見ればこれも全然出ていない。——おや脚の故障か——

もう一度引っこめて車輪出しの操作をする。——やはりいけない。敵弾にやられたらしい——事故記号の合図をして戦闘指揮所の前を超低空でふっ飛んだ。地上から車輪の状況を確認してもらったためである。然し地上からは何の信号も送ってくれない。拝むような気持でもう一度超低空をやった。相変わらずこちらの意図が判らぬらしい。このままでは着陸と同時に機体はこわれるが、燃料を考えると二度繰り返す気にはなれない。

折角ここまで無事で帰って来たのに、自分の基地で飛行機を破損させるのか、情けないことになった。仕方がない。強行着陸あるのみ。

タンクは空だから火災の心配はあるまい。着陸経路に進入した。

フラップを下げ、プロペラの回転をぐっとおとす。機体は着陸誘導燈に沿って、照明された滑走路に近

づいた。——地上二〇メートル——青草が矢の様に流れる。火炎予防のためスイッチを切った。爆音はハタと止んでプロペラはゆるやかに空転している。スペリー照明機が流れるように後方に去った。地上三メートル——失速直前である。スーと機体が沈む。

操縦桿を一杯に引いた。——不安と期待の瞬間——ゴロゴロという音が機体に伝わった。おや、別にショックもなければ、プロペラも曲らない。走り続けている。なんだ車輪は出ていたのか。最後迄気をもませる。

ああ、とうとう着陸した。一度に全身の力が抜けて気が速くなり、機体が止る前にガックリうつ伏せになってしまった。始動車に乗って馳せつけた機付班長が停止したばかりの飛行機の翼に飛び上がった。風防を開くや否やもの言わずに私の首にしがみついた。やっと意識を取り戻した。私が最初に発した言葉は「脚、脚」であった。機付班長はげんな顔をしている。「脚だよ」私は翼の下を指した。

「ああ、この機の指示棒ははじめからこわれているのですよ」こともなげに言った。——こん畜生、こっちの身にもなってみろ——。

ピスト前まで地上滑走。機付がかけ上がった来て、私の装備を外してくれた。よろめくように地上に降り立った私を、同僚のNが走り寄って来てすっかり抱擁した。今日出撃の際五人並んだ位置に、私は唯一人直立して部隊長に対した。

「坂本編隊攻撃終了。特攻機は全機沖繩上空に進攻せるも熾烈な対空砲火のため二機撃墜さる。他の二機は19時35分米艦船群に突入。中型艦二隻に夫々命

中。日没と砲火のため遺憾ながら、戦果確認し得ず」
「御苦労じゃった。貴様の無線は沖繩上空から受信できた。ゆっくり休養せい」

部隊長の言葉も淡々としていた。だが相對する二人の心に、ひそむ共通する思いは、帰らぬ若桜への愛惜の念であつたらう。

報告が終るや否や対空無線班長が馳せつけてきた。「聞えましたよ。然も沖繩上空からキャッチしました。素晴らしい空中状態でした」

時折発信した私のモールスが次第に感度が強くなるにつれ、欣喜したという。あのオンボロ無線機では、レコードだったらしい。

まだ私は休むどころではなかった。一同に抱き上げられるようにトラックに乗せられる。花蓮港の街を走り抜けて、通信隊へ送られた。台北の軍司令部へ直通電話である。今日見送りに来た参謀が、電話に出た。天候、敵情、進行状況、戦闘経過等々、情容貌もなく、三〇分以上に互る質問攻めである。それでも参謀に対してはまだファイトを持っていた。頑張り通して、ありのままを報告した。戦果確認の件に関しては叱りもしなかったが、報告が終って、御苦労とも言ってくれなかった。

なつかしい宿舎へ戻った。やれやれ解放されたと思つたのも束の間、私のニュースを聞いた、隣の飛行場に展開している三式戦闘機の部隊長が、深夜にも拘わらず、特攻隊員十数名を引き連れて、待ちかまえていた。私の戦訓を聞くためである。紅顔の隊員達に囲まれた私は、先程突入したばかりの四人の顔が思い出され、途切れがちな言葉に、聞き入る彼等の真剣なまなざしが、喰い入るように、私の視線

とぶつかり合った。

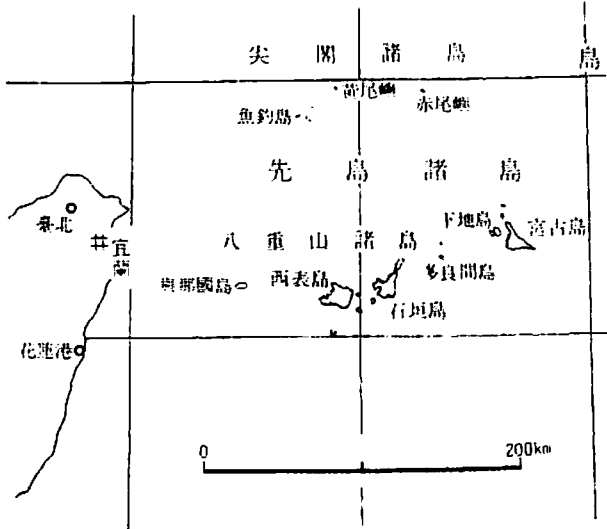
命令一下、明日にでも突入せねばならぬ彼等は、如何なる思いで、還つたばかりの私を眺めたことだらう。

トマトジュース一杯で、一時間に互る座談会をつとめねばならなかった。どうして寝台にもぐりこんだか覚えていない。

翌日。タプロイド判の台湾新聞に目を通して、驚いた。私の戦果が大きく報道されている。

「軍司令部発表。中型艦二隻撃沈」

の見出しである。私はかきむしられる思いで、参謀の作つた「撃沈」の記事を静かに、四人の遺品の前に捧げた。



殉国冲縄学徒 顕彰五十七年祭に参加

田中 賢一

靖国神社におけるこの行事は、冲縄慰霊の日である6月23日に毎年行はれている。主催者は元国士館大学教授で我が協会の相談役の金城和彦氏である。いつも感心するのは、祭文を奏上するのが大学生ということである。

今回は明星大学四年生の久田宏光という学生が奏上した。その主な個所を紹介すれば

中でも心に残りますのは、当時中学生であつた皆様が鉄血勤王隊並びに通信隊を編成され、直ちに陸軍二等兵として迫り来る敵戦車群に爆雷を抱えて突入し、あるいは敵陣へと斬り込まれ壮烈なる最期を遂げられた勇姿であります。通信隊となられた先輩学徒は雨のように降り迫る敵弾の中にあつても通信伝令に走られました。

また女学生の先輩方は、ひめゆり、白梅、瑞泉、名護蘭、梯悟、積徳学徒隊として大任を担はれ、従軍看護婦となり、砲声絶える間もない最前線に立たれ、或る時は兵をかばい自ら楯となり、食糧や医療品が日に日に不足して

ゆく厳しい状況下にも、常に優しく、天使のようなほほ笑みを以て精神力のあらん限りを尽くし、昼夜を分かたず負傷兵の看護に当たられました。さらに私の心を打ちましたのは、敵の爆撃により傷つき動けなくなり「俺に構はず行つてくれ、要らぬ心配はするな」と叫ぶ国吉界二等兵を、学友達が降りしきる弾雨の中、担架に担ぎ必死に護らうとされました。白らの命を顧みず友を護らうとされた生死分かたぬ友情には涙を禁じ得ません。

冲縄戦での諸先輩方の勇姿をお偲びしますと、先輩方の殉国の戦があつてこそ、今日の日本の平和や繁栄があるのだと、私どもは感謝の念が込み上げてきます。また先輩方の後に続くものとしてこの国に生をうけたことを誇りに感じずにはおれません。

昨年の八月十五日には、靖国神社には十二万七千余の國民が参拝しました。その中に、学生を中心とする多くの若者の姿が見られました。若い世代の中に英霊の方々に心を寄せていく人の数が増えつつあり、日本が目覚めつつあるのを感じます。(中略)

……英霊の方々が願はれた本来の強い日本、誇りある日本、美しい日本を若者は求めております。しかるに、現在政府内には、首相の靖国神社参拝に

反対する一部の近隣諸国に配慮して、靖国神社を否定し、「靖国で会おう」と、散華された英霊を冒瀆する国立追悼施設構想が進められております。私どもは断固阻止して参る所存です。(中略)……わが国を担う私ども学生が、祖国に殉じられた崇高なる諸先輩方の精神を継承し、誇り高き歴史を取り戻し、明治天皇の靖国神社のご創設の御心を拝し、天皇陛下の御親拝実現に向け尽くして参ることをお誓い申し上げます。

護国の英霊たちよ、願わくば、天翔りつつ、我等が進むべき道を照らし賜らんことを参列者一同心よりお願い申し上げます。私の祭文とさせていただきます。

祭文奏上に続き献楽が行はれた。
一、独唱(海ゆかば) 本間充
二、奉納吟 和心流宗家八雲和心
嗚呼冲縄学徒隊
今様
矢弾の中で健気にも
咲いて散りにし若桜
尊き御霊よ安らかに
五色の雲に祈るらむ

・詩
愛国の至誠烈火の如く
童顔の学徒防戦に当る

刀折れ矢尽き我が事畢る
相抱き相擁して遂に玉碎
和歌

悲しさのあまり井戸までかけたれど水汲みし子の足あともなく
一ひめゆり部隊に二人の娘を捧げ
た母の歌

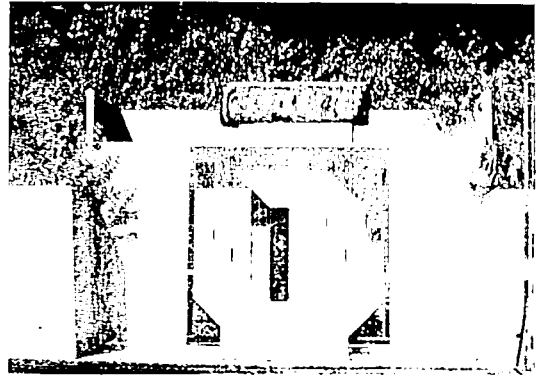
・詩
砲声天を焦がし弾雨降る
血河山野阿修羅の如し
学徒挺身死地に赴く
嗚呼忠魂萬古に薫る

三、合唱
ゆには合唱団
・冲縄県立第一中学校校歌
・冲縄師範学校女子部、冲縄県立第一
・乗船「対馬丸」と運命を共にした疎
開学童を偲び「故郷」の歌

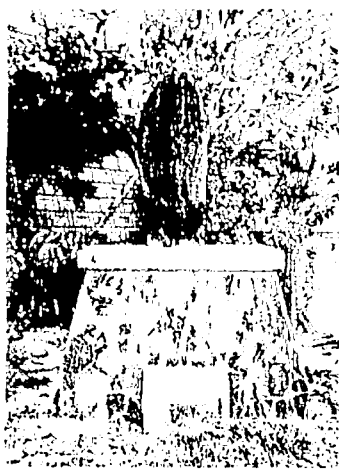
このようにして参列者の心に迫る祭典は、玉串奉奠を以て終わつた。
この祭典が教育行政を掌る政府当局の手で行なはれるようになり、殉国学徒のことが義務教育の教科書に載るようにならなければ、我が国の精神の復興は在り得ないと思うが如何に。



沖繩県立二中健児之塔 (那覇市奥武山町)



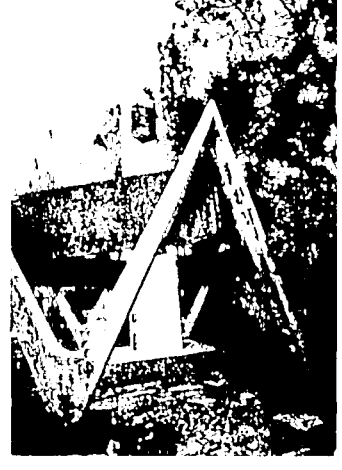
一中健児之塔 (那覇市首里金城町)



和魂 (那覇商業学校)
(那覇市松山)



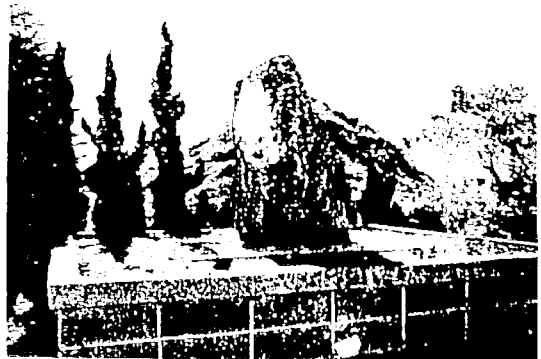
沖繩師範健児之塔
(糸満市字摩文仁)



農林健児之塔
(嘉手納町字嘉手納)



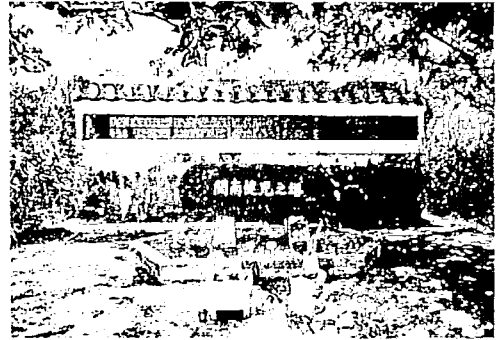
南燈慰靈之塔 (三中・三高女)
(名護市名座喜原)



翔洋 (県立水産学校)
(糸満市字西崎)



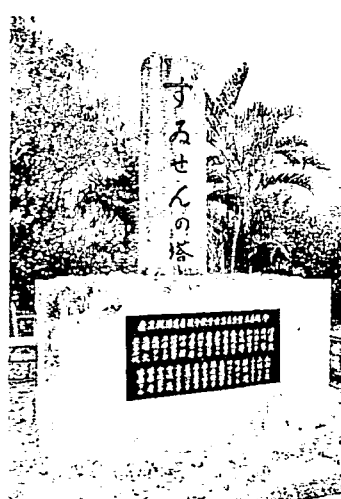
ひめゆりの塔〈県立一高女、女子師範〉
(糸満市宇伊原)



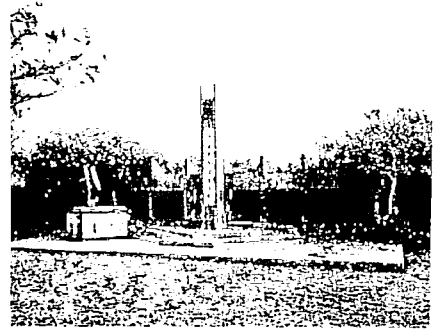
開南健児之塔〈私立開南中学校〉
(糸満市字米須)



白梅之塔〈県立二高女〉
(糸満市宇国吉)



ずみせんの塔〈県立首里高女〉
(糸満市字米須)



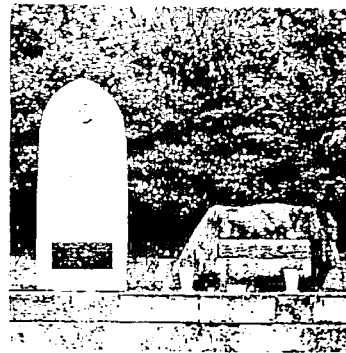
沖縄工業健児之塔 (糸満市字摩文仁)



梯梧之塔〈昭和高女〉
(糸満市宇伊原)



積徳高等女学校慰霊之碑
(那覇市松山)



三中学徒之碑 (本部町字並里)

那覇出版社発行
「沖縄戦写真集」より

「金武鎮魂碑」 建立の由来

編集委員

今回の沖繩巡拝で「金武鎮魂碑」に参拝したが、震洋関係者の参加がなかったため、建立の由来や現地について戦闘の模様など聞くことができなかった。前号の沖繩巡拝の手引の中で震洋関係の記事は、以前「震洋と①」について座談会を行ったとき、震洋会から提出された資料を抜粋したものであった。前号を印刷に付した後、震洋グループから記事の送付を受けたので、その中で建立の由来についての部分を、遅まきながらここに要点を抜粋して載せる。

……一方ある遺族の方より、「息子の戦死の地である沖繩金武村迄はるばる訪ねて行ってみても、息子たちが此処にいたという目印一つなく、沖繩も現代化の波に洗われ、息子達を偲ぶよすがが薄くなりつゝある。なぜか非常に心淋しい想いをして帰ってきた。どんな粗末なものでもかまわない。ちっぽけな石塔一つでもよいから、息子の戦死の地に何か建て、やりたい。」
という意見がありました。これは遺族のいつわらざる心情であろうかと思

は遺族の方々のかかる心情に動かされたいからでした。

……私共の部隊の戦没戦友に止まらず、近くは、僚隊であった第四十二震洋隊井本部隊、あるいは、沖繩最後の時期には陸海軍及び軍属また現地民間の防衛隊の混合部隊になりましたので、金武村周辺地区で、戦没されたすべての御霊を慰霊の対象に致したいと考えております。

又、現代並びに後世に生きるわれわれの子孫に対し、御霊の遺志と平和の尊さを伝えるよすがにしたいとも考えております。従って、これらの経緯と趣旨からして、余り多くの方々にご負担をかけずに金武会の会員だけで、内輪に建立したいと考えた次第です。然し、実際には、完成するまでに、金武会以外の方々よりも多大のご援助を頂き、厚く感謝しております。即ち碑の製作に当たりましては花崗岩の産地として有名な、茨城県稲田の大和石材店さんのご好意により、稲田白御影を素材にした立派な碑を、殆ど原価に近い価格で製作して頂き、又、主碑文「金武鎮魂碑」の文字は、有名な鎌倉円覚寺管長朝比奈宗源禅師のご揮毫を頂戴し、一方、建設用地の確保に当たっては、沖繩琉球放送の方々や、更には金

武区の安富祖区長さんを始め、区会議

員の方々、或いは戦時中部隊の者達が大変お世話になった、当時饅頭屋をやっておられた大城さんを始め金武村の住民の方々の非常にご理解あるご好意によって、曾つての部隊本部が設置されていた金武区公民館のすぐ隣りにある大洞窟（戦時中この洞窟は軍民の人々の避難壕として使われ、戦後は観光沖繩十選の一つとして、日秀洞と云う名前

前で広く紹介されており、私共にとっではまことつながりの深い場所です）この洞窟の入口近くに、無償で用地のご提供を頂いたり、更には、建設工事に際して、沖繩最大の建設会社国場組の国場専務さんのご好意により全く採算を度外視した費用で工事をして頂くなど、思わぬ有形無形のご芳志に恵まれ、昭和四十六年七月二十六日、現地にて盛大且つ厳粛に除幕開眼の供養式を開催させて頂くことが出来ました。出来上がった碑は、決して大きなものではありません。むしろ、沖繩各地に建立されているいろいろな慰霊碑と比べれば、一番小さな、一番簡素なものですが、しかしこの金武鎮魂碑もまた、非常に多くの方々の真心が結果されたものであり、建立して本当によかったと考えております。

以上は昭和47年5月21日の東愛知新

聞に、金武会幹事岩田昭郎の名で載った記事の要点である。
以下は今回の巡拝の写真



般若心経を誦す

都城特攻慰霊祭における

ご遺族のご挨拶の紹介

事務局長

ここに掲載するご挨拶は第60振武隊で出撃、散華された故永田利夫伍長の令妹・測協フサエ様から寄せられたものである。

「本日も、このように厳粛・盛大で心安らく慰霊祭を挙げて頂きまして、市長様を始め、ご関係の皆様、またご当地の皆様方に、遺族の一人として心より厚く御礼申し上げます。

私達兄弟は、この慰霊祭に参りますと、年に一度、兄に再会できたような気持ちでございます。

私は、この慰霊祭に参るたびに、昭和20年の11月、父と二人で兄の遺品を受け取りに都城まで来たことを、今でも、ありありと思い出します。

思い起せば、当時私は15歳の女学生でした。昭和20年2月頃、兄からの葉書が都城から来ました。家族一同は、近くに来たと喜びましたが、葉書には元気であるから、面会には絶対来るなと、書いてありました。まさか、あの葉書が最後になるとは思いもしませんでした。

それから2、3ヶ月過ぎた、昭和20

年5月6日頃、倉本隊長様の奥様から手紙が届き、兄は5月4日の早朝、沖縄へ元気で出撃したと書いてありました。

そしてもう一通、見知らぬ人の手紙が届きました。それには西都城市牟田町・大津富子と書いてありました。

手紙には兄のことが、詳しく書いてありました。兄は都城に来てから、大津様が親身になってお世話して下さいました。

「僕は、今日、鹿児島へ帰ってきたよ」と嬉しそうに話したそうです。きつと、我が家の上空まで飛んで来たのでしよう。その夜は、心おきなく歓談し、最後の晩餐だったようです。

大津様は出撃4日の早朝には、兄の特攻機が見えなくなるまで、手を振って別れを惜しんで下さったとのこと。そして、兄の遺品を預かってありますので、受取りにきてほしいと書いてありました。また最後の一枚には、兄に送る歌は何首か書いてございました。

見知らぬ人からのお手紙に、両親が驚き、嘆き悲しんだあの時の様子が、今も胸に残り、忘れることはできません。お国の為とは言え、自慢の息子を国に捧げた両親の気持ちは、いかばか

りだったでしょうか。それから両親は、一日も早く遺品を受け取りに、お伺いしなければと言っていました。6、7月は空襲が激しい時期でしたし、8月には終戦となり、戦後は食料不足で、行くに行かれました。戦後は秋の収穫を済ませてから、獲れたばかりの米とさつまいも、山芋、それと母が心を込めて作った、から芋飴等をリュックにいっぱいつめ、11月始め父と私が都城に向かいました。今では自家用車で2時間余りで行けますが、その当時は、まだバスも電車も通りませんので、朝早く家を出て、舗装もしていない、16杆の石ころだけの国道を下駄履きで、鹿児島駅まで歩きました。

鹿児島駅から汽車に乗り、西都城駅で降りましたが、何時間かかかって着いたのか覚えていませんが、たしか夕方のようにでした。西都城一帯も、鹿児島と同様、一面の焼け野が原でした。

父と私は道案内の手紙を頼りに、駅から埃だらけの道を歩きました。大津様宅は、すぐに分かりました。戦災に合われましたのに、早くも仮住居を建てていらっしゃいました。

大津様宅は、ご両親と義雄様、富子様の4人家族で、義雄様は、お寺のご住職をなさっていらっしゃいました。

私達は初めてお会いするのに、暖かくお迎え下され、心から歓待して下さいました。汗と埃にまみれた私達にお風呂まで用意されていました。その頃、お風呂を沸かすということも最高のもてなしでした。

お風呂は、庭に石を積み重ね、その上に、ドラム缶を乗せた露天風呂でした。私は入るとき、深くて恐かったこと、でも、疲れた体の私には身も心も温まり、最高の気分だったこと。一生に一度しか経験できなかったドラム缶の露天風呂は、今だに忘れようとして、忘れられない思い出です。

夜は富子様始め、ご家族の心のこもったおもてなしを受け、兄の思い出話に時の経つのも忘れませんでした。

翌日、兄の遺品の入った落下傘袋を頂き、鹿児島に帰りました。帰る汽車の中で、父が遺骨を抱いて帰る気持だと言ひ、二人とも無言で、帰る足取りは、とても重いものでした。また何時間かかって帰り着いたか、覚えていません。

我が家では、母と弟、妹達が首を長くして待っていました。みんなで落下傘袋を開けましたところ、トックリのセーター、日記、朝夕使っていた自分の品々、そして髪の毛、爪、それに、どこか分らぬ縮れ毛がありました。こ

こ

れがどこの縮れ毛か、皆様、ご想像下さいませ。

髪の毛や爪はお墓に眠っていますが、兄の遺品や、倉本様・大津様のお手紙は、知覧の特攻記念館に預かって頂いております。

私はご当地の皆様のご理解とご協力、そして大津様ご家族のご配慮がなければ、兄の遺品は無かったのではないかと思います、ほんとうに感謝の念で、いっばいでございます。

あの時たいへんお世話になった大津様に、いつかは父と一緒に、お礼に参らねばと思っておりましたが、父も早く亡くなり、また、私も自分達の生活に追われ56年の年月は瞬く間に過ぎて、本日になってしまいました。

こうして、ご当地に参りますと、あの時の事が走馬燈のように思い出されてなりません。今は大津様のご消息も判らず、お礼を申し上げることもできませんが、本日、都城市民の皆様方に56年前のできごとを、ご報告申し上げます。お礼を申し上げることができまして、兄を始め、両親も、さぞかし草葉の陰から喜んでることと思います。私もこれで、長年の思いが叶い、胸のつかえが取れたような気持ちでございます。ほんとうに有難うございました。大変、長話になりましたが、これから

も元気でいる限り、お参りしたいと念じております。

最後に、市長様はじめ、ご列席の皆様方のご健勝を、心から御祈念申し上げます。お礼の言葉と致します。有難うございました。

平成14年4月6日

遺族代表 淵脇フサエ



都城特攻碑

特攻隊員に敬虔な祈り

女子高中生二人

会員 中村 三郎

藤山二典中尉 陸士56期

第22振武隊 一式戦

4月3日知覧出撃

大東亜戦争中、特攻隊員として飛び立ち、徳之島上空で米軍機に撃墜された藤山二典中尉について調べ、文化祭で発表した鹿兒島南高校小野原麻祐子さん(二六)と田上春佳さん(二六)それに藤山中尉の姉藤山敏子さん(八一)と娘の中島紹子さん(四九)が24日対面してともに鹿兒島市の武岡霊園にある藤山家の墓詣りをした。

小野原さんと田上さんは高校の文化祭で特攻隊員について調査。知覧町の特攻平和祈念館などを訪れ、高校の先輩である旧制第二中学出身の藤山中尉が特攻隊員として出撃した事実を知り、当時の様子などを発表した。

この事を知った藤山中尉の友人だった鹿兒島ヨコハマタイヤの中村三郎が二中同窓会長である関係もあり藤山さんに連絡。藤山さん母娘は早速墓参の為来鹿し、高校生らと感激の対面をした。

藤山さんは「弟が死んでも父母は何も言わずに耐えていた。また弟は自分が特攻に征く事を『人に言ってはならない』と口止めしていた」と話す。

小野原さんと田上さんは「感謝してもらってうれしい。家族が何年も長く悲しむ戦争の事を深く思う」と命の尊さをかみしめていた。

価値観が戦前、戦中と大きく変わった昨今、こうした事に執念して行動した若い女生徒らの姿に、沢山の別働の友を戦没させた吾々戦中派は思いに深く沈むのである。



死の恐怖が断ち切れた日

乾龍特別攻撃隊

海軍中尉 茗荷 滋

特攻隊員となる迄

昭和18年6月、第十三期海軍飛行専修予備学生を志願、大学高専卒業の応募者数万人の中から、同年9月5、一九九名が採用され海軍航空隊に入隊した。昭和19年7月末、短期養成のスバルタ教育で、五四〇余名が搭乗員から

外されたものの四千数百名が全課程を終了。仲間の多くは実戦部隊に配属されたが、私は偵察専修の飛行練習生の教官として、高知海軍航空隊に赴任を命ぜられた。

同年10月米軍が比島に侵攻、制海権が失われた時点で、南方よりの燃料補給が困難となり、年末頃には国内の教育部隊での飛行訓練は中止となった。そして在隊の教官一〇〇余名に対し特攻機指揮官の募集が行なわれた。そして米軍が沖繩に上陸する前の昭和20年2月下旬、かねて出願中の教官の中から、特攻隊員として二〇名が指名された。一〇名が姫路海軍航空隊(特攻白鷺隊として九州串良基地に進出、4月6日三名乗り組みの九七式艦上攻撃機に八〇〇挺爆弾を装着、沖繩に出撃全

員戦死)へ、他の一〇名は観音寺海軍航空隊に転出した。私は高知空司令以下準士官以上による盛大な壮行会と見送りを受けて、観音寺空の方に赴任した。ここでは既に練習機教程を終了した下士官達が特攻機要員として飛来して居り、之から内地侵攻の敵船団攻撃の為、夜間飛行訓練を開始するの事だった。昼間の計器飛行から始まり、夜間の飛行訓練も終盤に差しかけた7月3日のことである。

特攻訓練

一般隊員の飛行作業が終了し、引き続いて教官教員のみによる訓練に入った。瀬戸内海のある無人島を目標として、三機編隊での突入訓練である。想定では先ず一番機は編隊を誘導、目標の一杆米手前で展開を下命、編隊を解き、目標上空に至り照明弾を投下する。二番機は発火と同時に突入、一〇秒おいて三番機、そして一番機が最後に反転突入することであった。

私は二番機の搭乗を命ぜられ、その後席に乗り込んで居た。当夜は全く月明の無い暗夜であったが、高度一〇〇〇米で瀬戸内海上空を飛行、やがて左右六〇度に展開すべき地点にきたが、一番機から何の指示もない。その儘目標の直前に来て仕舞った。一番機は攻

撃をやり直すすきであったが、展開を指示して来た。そして目標が行き過ぎた仕舞うので、あわてて照明弾二発を投下した。

二番機は真先に突入しなければならぬ。危ないと思ったが、距離が開いてから降下すれば三番機と接触する。直ちに前席の操縦員に突入を命じた。機首が下がりがり降下態勢に入った途端、

パッパッと目の眩むような閃光が走った。照明弾二発の間を通過したのだ。前席の操縦員は目を強くやられ、頭を右に左に動かしている。恐らく計器類も見えなくなり操縦不能に落ち入ったのであろう。降下中の機体は回転し、異常な動きで落下し始めた。この儘では海上に激突する迄が命だ。何とかして高度を保たねばならない。気速計の速度はどんどん増加し、その指針は空中分解速度に近づいて来た。「操縦桿引け!」と叫ぶと今度は逆に気速計の針が失速寸前となって来る。「操縦桿押せ!」と叫ぶと共に刻々と変化する

高度と速度とを操縦員に伝えつつけた。なんとか水平に戻ったと思われたので、飛行場方向に転針を命じた。機が旋回を始めるや否や、再び機体が回転し、落下し始めた。二個ある高度計の一〇〇米目盛りの針が、通常の一〇米

目盛の針と同じ速さで廻り始めてきた。

外を見ると右も左も足下も、総べてが星空ばかりで、恰も宇宙に抛り出されたような感じであった。最早これまでと落下傘降下を決意し身体を起こそうとしたが、肩が座席に吸い付いて動くことも出来ない。ふと頭上に目をやると、黒い海面がぐんぐんと迫って来た。

やがて波のうねりが見えて来て、その波頭には月の光がキラキラと輝いていた。「何と美しい夜だろう」と思うと同時に「左上方海面」と叫んで居た。それからの記憶は無い。気が付いたら何と操縦員は視力が回復して来たのである。あの夜間難採み状態から離脱して、海面すれすれに機を飛ばしていった。エンジンは正常に回転している。やれ助かったと思いい前方向を見ると、水平線上の黒い山並が、小きざみに揺れている。まだ操縦桿を握る指先がふるえているのだ。あせってはいけない。操縦員の気持を落ち付かせねばならない。暫らくはコンパスを見乍ら機位を確認しつつ、その儘の針路を飛ばせ続けた。そのうち次第に高度もとれ、操縦も安定して来たので、頃合を見て「飛行場に帰る。針路〇〇、ヨー、ソロー」と転針を命じた。やがて飛行場近くの見慣れた島が目に入って来た。「分隊士、イブキ島が見えて来ました。」

と操縦員が初めて声をあげた。
飛行場上空に達し、着陸許可を求め
べく地上指揮所に向けて灯火信号を
送ろうとしたら、オルジスが無い。先
程の難採で、太いコードと空中にすっ
飛んでしまつて居た。止むなく飛行場
上空を一周し、離陸する飛行機の無い
事を確認して着陸した。幸い他の小隊
は総べて作業が終了して居り、我々が
最後であった。時刻は既に午前0時を
過ぎ、7月4日となつて居た。

特攻隊員となり既に四ヶ月が経過し
ていた。

部下を引きつれ、敵船団に突入する
時、果して彼等の手本となるべき行動
がとれるかどうか多少の不安もあった。
少しでも心に迷いがあれば成功は期し
難い。急行下訓練では既に四名もの隊
員が、海に激突し殉職して居た。

毎夜の急降下訓練に際しては、引き
起こし時の機体の沈下量を考え、つい
早目に引き起しを命じて仕舞う。明日
はもっと深く突込んでやろうと一人密
かに反省する日々が続いて居た。

照明弾は約二分間輝き、約三〇秒間
残り火となつて赤く漂つて消える。先
の月の光と思つた波頭のキラメキは、
照明弾の残り火であった。身体が座席
に張り付いて最早これ迄かと観念した
時、「何と美しい夜だろう。皆こうし

て死んだのだ。」と思つただけで、迫
り来る死に対して全く恐怖を感じるこ
とは無かつた。

死に対する恐怖心というものは、地
球上の生物総べてか、その生命を維持
出来るよう神がお与え下さつた要件で
ある。通常では人間個人で生存中、死
を克服出来る筈がない。特攻隊員たり
とも全く同じである。

人は暇が出来ると妄念におそわれる。
目的を持ち一つの事に意識を集中して
いる時、余計なことを考える暇はない。
戦場であの猛烈な集中砲火の中、目標
を定めて突入している時、死の恐怖等
頭に浮ぶ余地は無い。「俺でも出来る。」
とこの度の経験によつて確信すること
が出来た。

特攻出撃待機

観音寺空は7月下旬、所定の訓練総
べてを終了し、全機如何なる暗夜でも
出撃し、適確に敵艦船に激突出来る自
信がついて来た。そして五〇機が乾龍
特別攻撃隊と命名され、九州南端の固
分基地に、他の五〇機は坤龍特別攻撃
隊として大分基地に進出して行つた。
ここ迄来ると隊員一同は、乾坤一擲
やるしかないという心境になつて居た。
我々には曆等関係ない。8月の何日だつ
たか記憶にはないが、種々島南方を航

行中の空母を含む敵輸送船団に対し、
夜間燃料片道分の特攻命令が下かつた。
出撃編成表を見ると第九番隊長となつ
て居た。
奇数番隊が偶数番隊をも指揮する。
列機は八機だ。最後迄残しておいたド
イツ製のカメラ、新品の短靴、予備の
飛行用手袋等を、取材に来て居た日本
ニュース、大阪毎日新聞等の報道班員
達に分ち与え、身辺整理して待機して
いたら、出撃は中止となり、数日後終
戦となつていた。

出撃待機中、防空壕の入口附近で最
後に仲間と撮つた写真が居間にある。
今も心の支えとし、先に征つた戦友の
御蔭により今日生かされている事を、
決して忘れてはならないと心に誓つて
いる。

追記

第十三期海軍飛行専修予備学生は、
昭和18年9月入隊、僅か十ヶ月で全課
程を終了、昭和19年7月内外各地の部
隊に配属、更に赴任先で練成教育を受

待機中の乾龍特別攻撃隊の小隊長達
20年8月固分海軍航空基地防空壕入口附近にて



茗荷中尉
三山中尉
黒河内中尉
松本中尉
古沢中尉

十三期海軍飛行専修予備学生出身の士官達は各隊赴任後終戦迄の僅か一ヶ月間で、三分の一に当る一、六一六名が戦没し、其の内四八名は特攻で出撃、爆弾と共に戦死している。国家危急の秋、自分の国を護るのは若者しかいないと自覚し、個人にとつては、かけがえない貴重な生命を投げ出し、国民を護ろうとした特攻隊員は、皆一度は必ず心の中で生への執着と葛

藤を続け、遂に之を克服大義に殉じたものと思われる。今の高校生が歴史の授業が始まる時「又日本の悪口か」と嘆かせる教育が行なわれているのを耳にするにつけ、何とも遺る瀟ない悲に襲われる。我々八〇歳前後の老人が、五〇数年前若者だった時代、どんな思いで何を為して来たか其の真実を記録に留め、次代の日本人が是非民族の誇りを取り戻して、正常な国家を形成して欲しいと切に願う次第である。

特攻戦没搭乗員数 一、五二二名
 内戦没士官数 七六九名
 (特攻隊員の三〇・五%に当る)
 内飛行科予備士官数 六五八名
 (特攻士官の八五・六%に当る)
 内十三期予備士官数 四四八名
 (予備士官の六八・一%に当る)

即ち特攻隊員三人に一人は士官であり、士官の八五%が民間から志願して入隊した予備士官であり、予備士官の七割が、学徒動員前に自ら志願して入隊した十三期生であった。

特攻戦没搭乗員数 一、五二二名
 内戦没士官数 七六九名
 (特攻隊員の三〇・五%に当る)
 内飛行科予備士官数 六五八名
 (特攻士官の八五・六%に当る)
 内十三期予備士官数 四四八名
 (予備士官の六八・一%に当る)

藤を続け、遂に之を克服大義に殉じたものと思われる。

今の高校生が歴史の授業が始まる時「又日本の悪口か」と嘆かせる教育が行なわれているのを耳にするにつけ、何とも遺る瀟ない悲に襲われる。我々八〇歳前後の老人が、五〇数年前若者だった時代、どんな思いで何を為して来たか其の真実を記録に留め、次代の日本人が是非民族の誇りを取り戻して、正常な国家を形成して欲しいと切に願う次第である。

平成十四年三月記



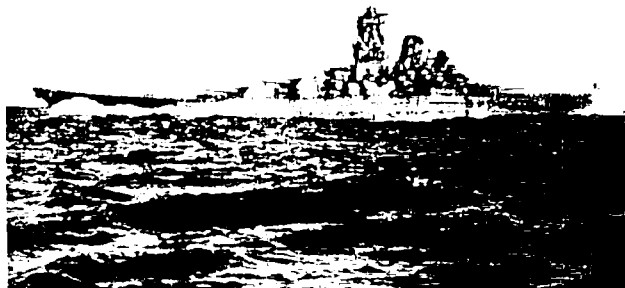
洋上慰霊祭を顧みて

皆本 義博

洋上慰霊祭は、雨こそ降らなかつたが、強風の中で、厳粛に全参加者参列のもとで行われた。

陸海軍の水上・水中特攻は勿論、陸海軍航空特攻も、その殆んどが敵艦艇の攻撃に向けられ、洋上で散華された。慶良間の島から望見した私どもは、空を乱舞する艦載機の間を縫って、洋上を覆う艦艇に突入する特攻隊員の神々しい敢闘振りに、自隊正面の敵の攻撃も忘れて健闘をたたえ又喝采した。

此の慰霊祭では、沖繩第三十二軍の支援を任とする伊藤整一中將の指揮する第二艦隊で、片道の燃料で、鹿児島県薩摩半島坊ノ岬沖で、敵二百機の攻撃をうけ、戦艦大和・巡洋艦矢矧・駆逐艦四沈没、艦と運命をともした三千七百余名の平和の礎にも刻名されない方々や、九州に集団疎開途中、奄美大島の悪石島沖で潜水艦の攻撃で対島丸とともに困難に殉じた五七七名の学童また大町少將はじめ洋上で戦死した方々と一緒に慰霊を行った。全員が潮風に吹かれながら涙とともに海往かばを斉唱した。



戦艦(大和)



渡嘉敷島を望む

平成十四年五月

沖繩巡拝文叢

田中 賢一

義烈の御霊に捧ぐ

戦艦んで半世紀余 ここ摩文仁の丘に登れば 連なる塔碑のもと猶ほ魂魄の漂ふをみる 摩文仁は沖繩戦終焉の地なれば 戦没の英魂悉くここに集まる。皇上守護の一念に燃え国に殉ぜしをのこ 就中義烈の烈士 身を捨て航空特攻の成果を挙げしめんとせしなり

昭和二十年五月二十四日夜 読谷飛行場の混乱振り敵の無線傍受により彷彿たりき 然れども大厦の倒れんとするや 一木の支うるところにあらず 悲願空しく戦敗れたり 往時茫々たれど 奥山 渡部 宇津木の面影 我が臉に消えることなし 朗々たる音吐我が耳朶に存す 下士官兵の面々 個々の面識なけれど 次の遺詠は我が肺腑を穿つ

よしや身は千々に散るとも来る春に

また咲きいでん靖国の宮 関 三郎軍曹

奥山に名もなき花と咲きたれど

散りてこの世に香りとどめん 今村好美曹長

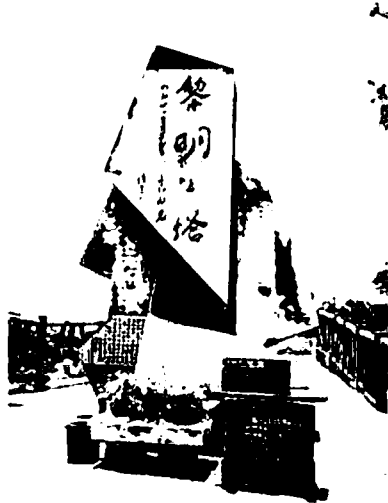
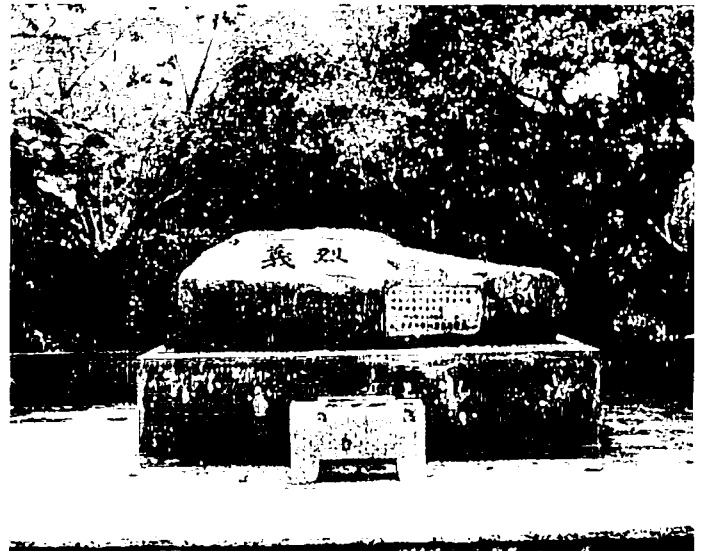
嗚呼 崇高なる哉 その精神

富む春秋國に捧げし友垣に

濟まぬ思いの八十路かな

我既に余命渺しと雖も 背て共に抱きし志を失うことなく 諸霊が歩みし路を世に顕彰せんとす 乞う

開せ給え



摩文仁台上黎明ノ塔ノ傍ニ立チテ懐ヲ述ブ

渺茫トシテ大洋限リ無ク 遙カニ舟楫ヲ見ス 孤丘惨トシテ靈魂漂ウ 語ズル人声断チテ 窟室ヲ凝視ス 將軍貴ヲ負ヒテ此所ニ自刃ス 矢弾尽キ天地染めて散るとても

魂還り魂還り皇國護らん

時マサニ昭和二十年六月二十三日四時三十分ナリキ 泉敵ヲコノ島ニ迎ヘシヨリ八旬余 寡兵以テ衆敵ヲ拒ギシモ 陸海ノ熾烈ナル砲火に畏悉ク毀チ 流血山野ヲ染ム 学徒数多軍ニ從ヒテ國ニ殉ゼシハ 哀痛限リナシ 海空ノ特攻烈士 天翔リ波押分ケ敵艦ニ迫リシモ 狂瀾ヲ既倒ニ廻ラシ得ズシテ 皇上ノ一角ヲ失ウニ至ル

星移リ歳替リテ今ヤ南国ノ天地 光彩陸離ノ裏ニ慰霊ノ塔碑來客ヲ迎ウ 客往時ノ惨状ヲ感得スルモ 英霊ノ御心マテ思イ至ルヤ否ヤ 皇土防衛ニ命捧ゲシ人ノ靈籠ル塔ナルニ 陽光燦トシテ一見平和ナルガ如キモ 異貌ノ敵ノ近海ニ迫リシ事例過日ノ如シ 慰霊ノ塔ニ応ウル道忘ルベカラズ

「空華之塔」に寄す

沖繩には慰霊の塔は全島に数えきれない程あるが、航空関係のものには極めて少ない。航空同人は「雲」を墓標と思つて居るのか。少ない地上の墓標の一つに「空華之塔」がある。空華とはよくも名付けたものだ。空に散華した人たちの霊がここに籠もつて居るのか。摩文仁台上の一番高い所に南向きに建っている。

陸海軍航空部隊はここを先途と戦つた。特攻を主体とする我が航空戦は、初めは敵を押し切るかに見えたが、やがて物量に圧倒され敗れ去つた。しかし特攻という世界戦史に類を見ない攻撃精神は、燦として輝いている。

初頃の我が航空攻撃の凄じさについて、米海軍の従軍記者は次の通り報告している。

敵機の攻撃は昼も夜も絶えたとがなない。慶良間の錨地は損傷艦で埋め尽くされ、太平洋に至る所、波を曳く艦船の列が東へ東へと進むのが見られた。

悪天候が時々の休息をあたえてくれる以外は、特攻機が連日連夜襲つてくるために休む暇はない。眠るといっても、夢まぼろしの間に身体を横たえているだけである。警報が発せられ

ると水兵共は痲癩を起こし、モウ止めてくれと叫び全員がヒステリー症状だつた。

航空の英霊は今の日本人に言うだろ「お国を守ると言うことは、容易なことではないぞ」と。



「飛行第十九戦隊特攻之碑」に思う

台湾の第八飛行師団に属するこの戦隊(三式戦装備)は、沖繩戦で二十二名の操縦者を失い、内十七名が特攻戦死である。その一人大出博紹少尉(特操1期)の突人の模様を、直援の渡部国臣少尉(57期)が大出少尉の両親に次の通り報告している。

四月十一日勇躍多くの人に送られ基地宜蘭を発つて一路沖繩へと進攻しました。大出君は攻撃間私の僚機につき発つて帰らぬ前途へ従容として居られました。進攻間僚機の位置にびつたりとつき手を上げて笑つて居りました。薄暗くなつた頃漸く敵機動部隊を発見、白い航跡をくつきり残して進んで行くのが見えました。丁度右下で、対空砲火は忽ち二機を包んでしまいました。

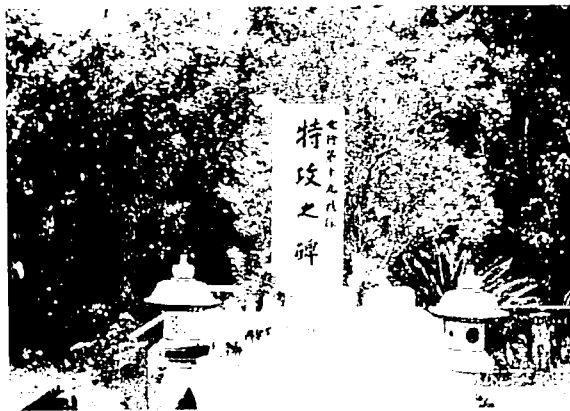
この時私が翼を振り合図するや、大出君は私に近づき莞爾として手を振りつつ反転して最も大きな巡洋艦に真直に突込んで行かれました。瞬間黒煙天に押し艦は真黒い煙の中に包まれてしまいました。攻撃間幸いに敵戦闘機には全然遭遇せず攻撃は成功したわけでありませう。私は言葉には言ひ表すことの出来ない淋しい気持でありました。我々も直ぐ後に続きます。出動も間近に迫

つております。乱筆御許し下さい。

陸軍少尉渡部国臣

これから一日後の四月二十二日渡部少尉も特攻出撃散華している。

これらの史実後世に伝えねばならぬ。



読谷飛行場跡に立って

ここはまだ米軍管理下にあるという。以前は滑走路の跡が認められたが、今は地域内を一巡する一本の舗装道路の外は、黙認耕作の砂糖黍畑になっていて、昔の面影はない。しかし眼を閉じて往時に思いをいたせば、かの唐瀬原で共に武を練ったゆかりの深い人達の、阿修羅の如き活躍が臉に浮かぶ。

砕け散る地上の敵機、爆発する集積燃料、逃げ惑う敵兵。それらのことは昭和二十五年五月二十四日、熊本健軍飛行場通信所敵信傍受班の多忙振りによって知ることが出来る。敵は火急の場合生文で放送する。最初に入ったのは二二四五である。

「北飛行場異変あり」

奥山隊長から只今突入の無線（多分着陸コースに入った意味だらう）が入ってから三十四分後である。その後敵の電波は乱れ飛んだ。

「在空中機は着陸するな」

「島外飛行場を利用せよ」

「母艦に着陸せよ」

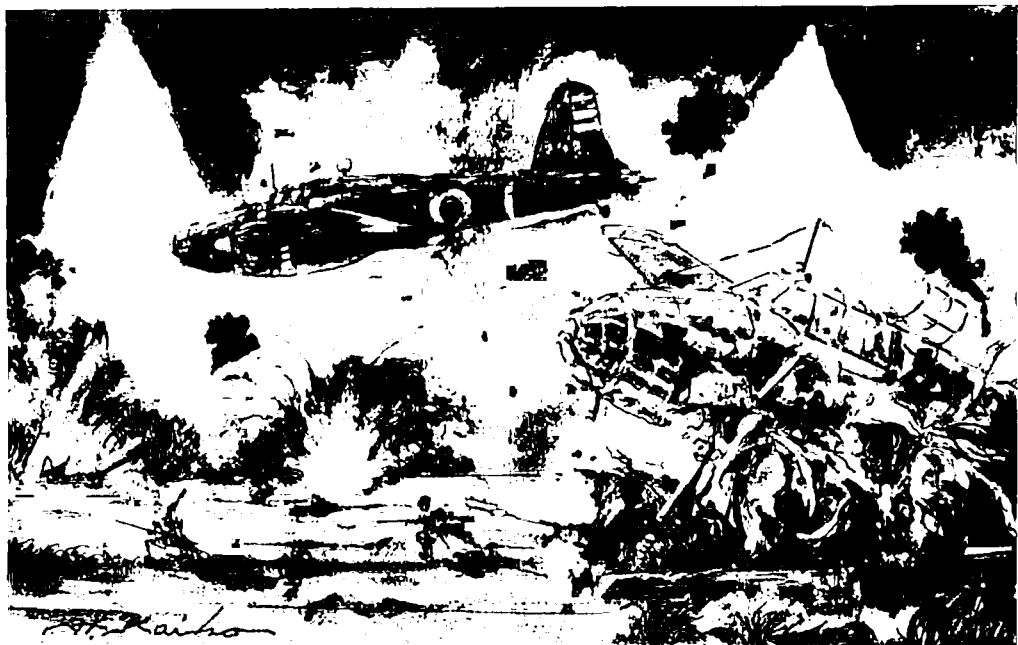
「母艦の位置知らせ」

「残波岬の九〇度五〇渾に着艦せよ」

米軍の混乱振りを伝える資料として、米国のある書物の一節……この全く信ずることの出来ない突発事と、それに続く混乱の模様を、くわしく書くことはむづかしい。なぜならばその大部分は、話から話に伝ってゆくう

ちに、真実がわからなくなってしまうからである。

米軍の資料によれば無事着陸したのは一機という。それは信じてよいだらう。その一機に全員の精神が凝集していたのだ。



少飛会海法画

「健児之塔」に詣でる

この塔は沖繩師範学校男子部で編成した「鉄血勳皇隊師範隊」の戦死者を祀る塔で、摩文仁台上黎明之塔の更に西方丘の中腹にある。この隊の学徒は三〇〇名、中二八八名が散華した。職員は一九名が戦死している。

我が協会相談役金城和彦氏の著書「嗚呼沖繩戦の学徒隊」によれば、学徒の死闘ぶりは涙なくしては読めないがそれにも増して感銘を覚えるのは野田貞雄校長の行動である。野田校長は陸軍囑託（高等官三等待遇）に任せられ軍司令部参謀部勤務を命ぜられた。

軍司令部が首里の洞窟に在ったときその中に入るように勧められたが、野田校長は、「御厚意は有難いが、校長として生徒の許を離れるに忍びない。私は最後まで生徒と共に行動したい。」と、その度に参謀部の勧めを断り、生徒のいる留魂塚に起居した。壕内において、校長は常に生徒の士気昂揚に努め、



あるときは古人の武勇伝を語り、あるときは青春時代の懐古談に一夜を明かし、あるときは生徒と共に虱取りに熱中し、あるときは陣中日誌を夜の更けるのも忘れて綴られたりした。

そのうちに戦況は急迫して、四月中旬からは、生徒たちも第一線に投入されるようになり、そして戦死した生徒名が留魂塚に報告されてきた。

その度に、野田校長は端坐瞑目して、その死を悲しみ、また現場に急行して埋葬に立ち会うなど、生徒にとっては慈父のような校長であった。

それだけに学校長の指示があると、生徒たちは喜び勇んでその指示に従い、弾雨の中でも我先に飛び出して行った。

五月下旬の摩文仁撤退の際も、暗夜の中を折からの雨に濡れ、ぬかるむ泥道に足をとられながら、飛来する敵弾を物ともせず、疲労の色も見せず、常に生徒の陣頭に立って鞭撻、敢闘した。

摩文仁到着後は、日を負って戦況は悪化した。校長は、芋藁や蓬などを主食にして、或る時は水びたしになった壕で、或る時は崩れ落ちた民家の豚小屋で、あるときはわずかに残った岩蔭で、生徒と共に終始戦い抜かれた。

六月二十日、軍司令官の命に従って、敵中を突破すべく、

二、三名の生徒と壕を出られたが、ついに不帰の人となった。

最後の様子については、敵陣に突入したという説もあり、また自刃されたという説もあるが、いずれにしても同道した者が全員戦死しているのので、詳細については不明である。

思えば師範隊が、祖国の栄光を信じ、意気天を衝くの気概をもって、われに百倍する敵を迎え、最後まで勇戦敢闘したのは、これ偏りに学校長の垂範、徳化があったからこそで、まさしく野田貞雄校長は、師範の神髄を発揮されたものと言うべきである。



少飛会海法画

「白梅之塔」に詣でる

白梅の香は消えず乙女らの

勲は永久に語りつぐがね

この窟に果てし御霊よ今ここに

みそなわせあれわが手こころを

沖縄県立第二高等女学校白梅学徒隊終焉の地と聞く。この隊の学徒は五十八名で二十五名が散華した。職員は十一名が戦死したという。

この隊の一人四年生の大嶺美枝の遺書は涙なくしては読めぬ。

お母様

いよいよ私達女性も、学徒看護隊として出勤できます。心から喜んで居ます。

お母様も喜んで下さい。

私は「皇國は不滅である」との信念に燃え、生き伸びてきました。軍と協力して働けるのはいつの日かと待っておりました。いよいよそれが私達に報いられたのです。何んと私達は幸福でせう。大君に帰し奉るにあたって私達はもつともいい機会をあたえられました。しつかりやる心算で居ります。

お母様は女の子を手離して御心配なさることでせうが、けつして御心配なさいませぬ。私は御母様の暖かい暖かいふところの中で、いつも可愛がられてすくすくと伸びて参りました。私はその暖かい御母様のお教を今こそ生かして、立派な日本女性としてお国に御奉公する覚悟でおります。軍医のお教へ、先生のお教へを学び、友と固く手を取り合つて、懸命にやっけてゆく心算でおります。

いよいよ御奉公のときがやつて来ました。しっかりやります。

お母様、私の身体はすべてお国に捧げたものです。その身体を私は大事に磨き上げ、国のためにつくします。

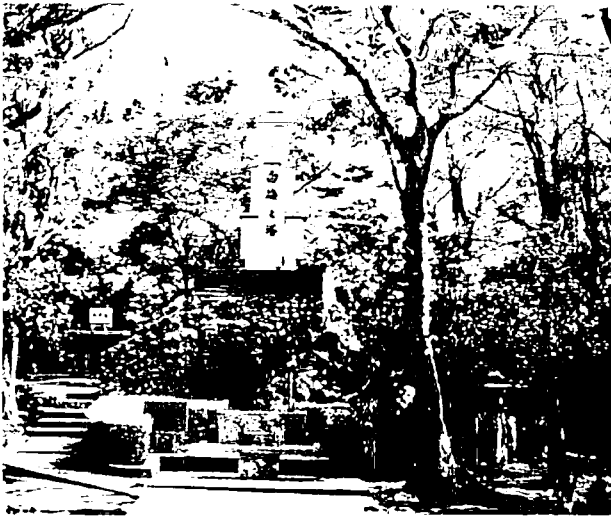
男でも女でも、詩にあります様に「国を思う道に二つはなかりけり」で、忠孝の信念に変わりはありません。私の身体は国が保証して下さいのです。ですから何の心配もなさらないで下さい。散るべき時には立派な桜花となつて散る積りです。その時は、家の子は「偉かつた」と賞めて下さいね。

出勤するに当たりまして、気になるのはお母様の健康ですが、どうぞいろいろの事を心配なさらないで、朗らかに明るくお暮らし下さい。少しの辛抱です。今にきつと日本が勝つて大嶺家を立派に築ける日があります。そしてきつと福の神がやつて来ます。その時はきつとお母様は必ず幸福になれると信じています。

お母様。人間は氣の持ち様一つです。いつも明るいお氣持で、日、日をお過ごし下さい。きつとお母様のお体は健康になられることでせう。

私が居なくなつたら、善ちゃん、弘ちゃんは淋しがるかも知れませぬ。(註、善ちゃん弟弘ちゃん妹)

それからお父様は御不自由なお体ですから、御飯は温かいうちに持たせてやって下さい。そしてお父様にもいつも朗らかに氣を持たれる様お伝え下さい。出来ましたらお父様は近くの塚にご案内したらと思います。(以下略)



安保の丘にのぼって

春雨しぶく嘉手納基地を目近に望む

広大な飛行場

嘗ての中飛行場はどの辺だったのか

敵上陸の四日前

ここを発進し群がる敵艦に突入した誠……

飛行隊の隊長広森中尉は言ったという

「愈々明朝特攻だ

いつものように俺について来い

次のことだけはお互に約束しよう

今度生れ変わったら

そしてそれが蛆虫であろうと

国を愛する誠心だけは失わないようにしよう」

東亜安定の要となつてゐる嘉手納基地

めぐるフェンスの中に

このような秘話があること

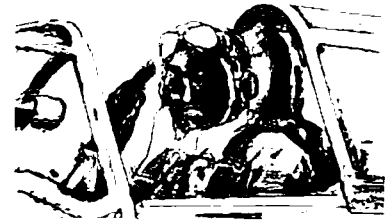
知る人ぞ知る



少飛会海法画



デッキに居並び思いにひたる



渡嘉敷航路船上にて

沖繩戦特攻の最大のものは航空特攻だが、烈士は総て水漬く屍となった。眺める水のおも、その何処かに英魂がある。

一、碧空蒼海 ぐが去り行きて

慶良間の海の 波静か

嘗て臬敵 ひしめきて

舳艫は千里 つらなりし

懐いはめぐる 特攻の

天駆けりゆく 肉弾は

あたりて砕く 仇し船

火炎残して 沈みゆく

三、波切り進む 蛟竜か

七首もって 刺すがごと

震うわだつみ 裂ける艦

おとこ命の 捨てどころ

四、潮の流れと 人の世は

早くも過ぎぬ 五十とせ余

生きながらえし 老兵の

胸迫りくる 波がしら

五、デッキに集う をのこらは

溢るる思い 海行かば

水漬く屍 山行は

歌声届けや 英魂に

六、波間に漂う 花束は

汽笛一声 去り行きて

見つむるまなこ いつまでも

逝きにし友を 懐いっつ

集団自決跡地に合掌

渡嘉敷島にこの碑がある。米軍の上陸を迎え、激しい砲撃の下この地で島民二六八名が集団自決した。沖繩戦中の最大の悲劇と言はざるを得ない。しかし、そこには殉国の精神を見る。私は同く沖繩出身の親泊朝省大佐を連想する。親泊大佐は第三十八師団参謀としてガ島で只に辛酸を符める。終戦時は大本營報道部長だったが、終戦後ミズリー号上で降伏の調印が行はれる前日の九月二日の夜、妻と二人の子供を伴い一家全員で自決した。

子供と妻は青酸カリを飲み、親泊は拳銃で自決したという。彼はガ島敗戦以来軍の要職にあつた責任を負ったのだが、妻の心情はその遺詠によつて知ることが出来る

「靖国の神々に詫びつ靖邦の子等伴ひて吾は逝くなり」

なにも幼い子供までもという気がしないでもないが、国が敗れたとき一家挙げて国に殉ずる気持には、至純のものがある。

会津落城に際し柴一家は、老母以下女だけ五人が屋敷にいたが、全員自刃している。白虎隊もおなじ事、国に殉じる精神は尊い。渡嘉敷島の集団自決もこれに通ずるものがある。

「とかしき島」という観光パンフレットをもつた。勿論集団自決碑のことなど載っていない。青い海の楽園と題し若者向けの写真が一ぱい出ている。観光とは次元が違ふことではあるか、何んとかしてこの史実、特に殉国の精神を今の人に知ってもらい度いものである。



◎ (陸軍の特攻艇) の洞窟を見る

必成を期して穿ちし岩穴に

往きにし歳をしのぶ草かも

十字鏃だけで掘ったという。その努力には感動を通り越して涙さえ覚える。ところが本島上陸に先だち渡嘉敷島が敵の猛攻を受け、企図秘匿の為艇を自沈するに至った。そして海上挺進戦隊は乏しい兵器をもって地上戦闘に移行し、多くの戦死者を出した。

赤い血で染めて咲きしかハイビスカス

いく歳経るも思いせつなし

前掲の集団自決島民も含め、この島で戦死した人々を弔う戦跡碑が建てられている。

沖縄県民の戦没者

沖縄県の各市町村には何処にも住民の慰霊塔がある。その数三六六基にも及ぶ。住民の戦没者は八万五千人と言はれている。県民が如何に戦ったかは、海軍沖縄方面根拠地隊司令官大田実少将が、最後に海軍次官宛に打った電報がよくその実状を表している。ここに掲げる。

沖縄県民ノ実情ニ関シテハ県知事ヨリ報告セラルベキモ県ニハ既ニ通信力ナク三十二軍司令部又通信ノ余力ナシト認メラルルニ付本職県知事ノ依頼ヲ受ケタルニ非ザレドモ現状ヲ看過スルニ忍ビズ之ニ代ツテ緊急御通知申上ゲ

沖縄島ニ敵攻略ヲ開始以來陸海軍方面防衛戦闘ニ専念シ県民ニ関シテハ殆ド顧ミルニ暇ナカリキ 然レドモ本職ノ知レル範圍ニ於テハ県民ハ青壮年ノ全部ヲ防衛召集ニ捧ゲ残ル老幼婦女子ノミガ相次グ砲撃ニ家屋ト財産ノ全部ヲ焼却セラレ僅ニ身ヲ以テ軍ノ作戦ニ差支ナキ場所ノ小防空壕ニ避難尚砲撃下??? 風雨ニ曝サレツツ乏シキ生活ニ甘ジアリタリ 而モ若キ婦人ハ率先軍ニ身ヲ捧ゲ看護婦炊事婦ハモトヨリ砲強運ビ挺身斬込隊スラ申出ルモノアリ 所詮敵来リナバ老人子供ハ殺サルベク婦女子ハ後方ニ運ビ去ラレテ毒牙ニ供セラルベシト親生子別レ娘ヲ軍衛門ニ捨ツル観アリ

看護婦ニ至リテハ軍移動ニ際シ衛生兵既ニ出発シ身寄無キ重傷者ヲ助ケテ? 真面目ニシテ一時ノ感情ニ馳セラレタルモノトハ思ハレズ 更ニ軍ニ於テ作戦ノ大転換アルヤ自給自足夜ノ中ニ遙ニ遠隔地方ノ住民地区ヲ指定セラレ輸送力皆無ノ者黙々トシテ雨中ヲ移動スルアリ之ヲ要スルニ陸海軍沖繩ニ進駐以來終始一貫勤勞奉仕物

資節約ヲ強要セラレテ御奉公ノ???ヲ陶ニ抱キツツ遂ニ? (数字不明) コトナクシテ本戦闘ノ末期ト沖縄島ハ実情形? (数字不明) 一木一草焦上ト化セン 糧食六月一杯ヲ支フルノミナリト謂フ 沖縄県民斯ク戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ

筆者注 傍点は意味不詳であるが原文のままとした。

市町村の慰霊碑の一例

那覇出版社発行の写真集より



国頭村戦没者慰霊之塔 (字辺土名)

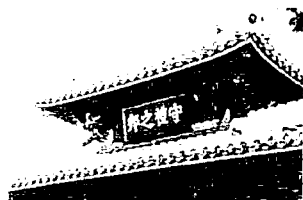


大宜味村靈魂之塔 (字大兼久)

特攻隊慰霊沖縄巡拝旅行

5月21日～24日

日付	時刻	行 動
5/21 (火)	11:45	那覇空港着 貸切バスにて移動 陸上自衛隊那覇駐屯地、沖縄県護国神社、読谷飛行場跡
5/22 (水)	09:00	貸切バスにて移動 万座毛、金武町鎮魂碑、東南植物楽園、安保の丘、中城湾、旧海軍司令部壕跡、首里城公園 (守礼の門、首里城)
5/23 (木)	10:00	フェリー 泊港発 ~~~ 渡嘉敷港 (11:10) 島内慰霊碑、戦跡等バスにて巡拝
	16:00	フェリー 渡嘉敷港発 ~~~ 泊港 (17:10)
5/24 (金)	09:00	専用バスにて南部戦跡巡り 白梅の塔、健児の塔、平和祈念公園
	16:15	那覇発全日空90便にて羽田へ



特攻隊慰霊沖繩巡拝に参加して

鈴木 藤太

覇駐屯地を訪問した。同隊資料館には沖繩

機に分乗特攻突入し、米軍基地機能を一時停止させる戦果をあげた義烈空挺隊の慰霊碑が建てられ、慰霊行に備えてか付近も清掃されていた。

な基地内を遠望した。南国特有のスコールに煙って展望がきかぬ中で、巨大な輸送機が数機駐機しているのが散見された。隣接する嘉手納町役場も、基地機能への配慮から高さを制限されているとの事に基地の島沖繩のおかれた厳しい現実を感じた。かつて激戦地中城湾を車中から視察し、訪れた小祿の旧海軍司令部壕では、沖繩戦に備え岩山に坑道を掘って築城した苦勞を偲ぶと共に、自決の際の生々しい弾痕が壁に残るのを見て太田司令官はじめ散華された将兵を偲ぶと共に、身のひきしまる思いだった。

戦後五十七年を経て、先の大戦末期、国土のうち唯一の戦場となった沖繩は、私共の世代の者にとって、あまりにも悲惨な印象から一般的な観光ツアーには参加する気になれないでいた所だった。近年は難病の妻の介護に忙殺される数年を過ぎたが、車椅子とベットの生活の療養の一助にと映画鑑賞の際最後に観たのが高倉健の「螢」だった。知覧基地から出撃した特攻隊生き残りの男と、難病で余命いくばくもない妻が、かつての戦友の遺族を訪れるストーリーで、画面には米軍によって撮影された、沖繩の海上に突入する特攻機の姿が何度も登場し、海軍で父が戦死した妻と車椅子ドライブで二度訪れた知覧の思い出と共に突入の目標だった沖繩は強く印象に残っている所だった。

れており、同隊広報官から沖繩戦に関する説明をうけた。これによって充分認識を深めると共に想像を絶する凄烈な戦況に身のひきしまる思いがした。終了後沖繩県護国神社に参拝してから北上し、旧読谷飛行場跡を訪れた。戦時中は北飛行場と呼ばれ、占領後米軍基地となった同地は未だ米軍管理下にあるとの事だったが、広大な飛行場跡は一面の砂糖黍畑となっており、村役場のすぐ近くに、沖繩戦末期重爆撃

ここで第一回の慰霊祭が行われ一同般若心経を奉誦し焼香した。折から涙雨と思われる驟雨がやって来た。路傍には真紅のハイビスカスが比地に眠る英霊を弔うごとく鮮やかに直径二十糎もある大型の花を開いて南国情緒を漂わせていた。

資料館に残る当時の写真や、最後に打電されたという「沖繩県民かく戦えり、後世格別のご配慮を賜わらんことを」の電文に当時の状況を偲び深い感動を覚えた。

昨年10月妻が他界し、葬儀後の諸行事も片付いた時、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の機関紙「特攻」紙上で、海上慰霊巡拝旅行を知り早速申し込んだ。5月21日羽田空港に集合、五月晴れの羽田空港を定刻に出発し、11時45分気温摂氏28度の那覇空港に到着した。先ず、空港に隣接した陸上自衛隊那

式終了後、思納村海岸のリゾートホテル、ムーンビーチに一泊した。5月22日は朝の内は晴天も見える好天候だったが、出発直後から海洋性気候特有の急変で曇天となる中で、すぐ近くの方座毛海岸を訪れた後島を横断し、東海岸金武町の海軍震洋特攻基地跡に建つ鎮魂碑前で慰霊祭を行った。

一同の唱える般若心経に和して、近くの幼稚園から鯉のぼりの唄の合唱が流れて来て、かつての激戦地にも時代の流れを感じた。

空模様は次第に悪くなり、雨の中訪れた東南植物園は沖繩の豊かな亜熱帯植物の生育環境を生かした植物園で広い園内をトロリーバスで見学の後昼食をとった。

食後次第に強くなった雨の中を、嘉手納基地わきにある安保の丘から広大な

当日最後の日程として訪れた復元された首里城では、守礼の門や首里城正殿はじめ遺構群に予想をこえる首里城の規模に驚くと共に、琉球の歴史と文化に対する認識を深めることができた。城内に今も残る元三十二軍司令部地下壕は保安上封鎖されたままだが、かなりの規模である事が推察されるので、一部でも復元して民族苦難の歴史の証しとして後世に伝えられる事を希望したい。

機に分乗特攻突入し、米軍基地機能を一時停止させる戦果をあげた義烈空挺隊の慰霊碑が建てられ、慰霊行に備えてか付近も清掃されていた。

ここで第一回の慰霊祭が行われ一同般若心経を奉誦し焼香した。折から涙雨と思われる驟雨がやって来た。路傍には真紅のハイビスカスが比地に眠る英霊を弔うごとく鮮やかに直径二十糎もある大型の花を開いて南国情緒を漂わせていた。

沖繩護国神社



食後次第に強くなった雨の中を、嘉手納基地わきにある安保の丘から広大な

当日最後の日程として訪れた復元された首里城では、守礼の門や首里城正殿はじめ遺構群に予想をこえる首里城の規模に驚くと共に、琉球の歴史と文化に対する認識を深めることができた。城内に今も残る元三十二軍司令部地下壕は保安上封鎖されたままだが、かなりの規模である事が推察されるので、一部でも復元して民族苦難の歴史の証しとして後世に伝えられる事を希望したい。

夜は那覇市内のホテル、サン沖繩に宿泊した。

5月23日は朝から初夏の太陽が輝く沖繩日和に恵まれた、気温も次第に高くなつたが、海に囲まれた南国の島特有の吹き抜けの環境からか、暑さはあまり気にならず、快適な日となつた。

午前10時泊港発の渡嘉敷島行フェリー「慶良間」で出航、沖合の甲板上で一日前日参拝した沖繩県護国神社神職の奉仕により、特攻隊戦没者洋上慰霊祭が厳修された。

五十七年前の同時期沖繩戦熾烈のさ中、この海空に散華されたみ霊を悼むごとく五月の陽光が降りそそぐ海は風浪高く、大きく動揺する甲板をふみしめて祝詞を奏する若い神職の音声は、哀切を伴って風声に和し英霊の照覧に応える如きびしきをもって耳朶を打つた。

式典後、全員で花束や神酒供物を海に捧げ「海行けば」の大合唱となつた。この情景は同行したNHKテレビ沖繩によって撮影され同夜のニュースで放映された。

戦後半世紀余を経た平和な海を渡るフェリーには、修学旅行の高校生群が同乗して甲板でこの様子を眺めていたが、珍しそうに不思議そうに眺める姿に、戦後教育のあり方によって、民族

の精神の断絶を感ずると共に、我国が直面した苦難の体験を私共の記憶に留めるだけでなく、後世の教訓として伝えることの重要さを痛感させられた。

対岸の渡嘉敷島に上陸し最初に訪れた山頂の村民集団自決の地では、米軍の砲火に追われこの地に果てた村長はじめ三百数十名の村民の悲運を偲び万感胸に迫るものがあった。

島内に残る作家曾野綾子氏の追悼碑、団員の元海上挺進戦隊中隊長だった皆本氏らが掘つた特攻艇収納洞など島内の遺跡を巡拝し、夕刻のフェリーで本島に帰つた。

同船には集団自決と同じ時期に退避し、岩陰で産まれたという同村の助役も同乗しており、戦争と人間の運命について考えさせられるものがあった。

同夜は出発後始めての合同夕食会となり、団員で元同方面の陸軍航空隊に属し、戦後航空自衛隊で那覇基地に勤務された高原忠敏氏や、元陸上自衛隊那覇混成団長の桑江良達氏も参加され、当時の貴重な体験談に接することができた。

特に桑江氏は同島首里の出身で、戦時中軍人として出征中沖繩戦で実母と実弟を亡くされた経歴の持ち主で、戦争の犠牲者の立場にありながら、戦後も祖国防衛の第一線の那覇駐屯地の司

令として、ある時期は反戦運動とも対決されたり、退役後は県議会議員として保革対決の議会活動で活躍された体験談は感銘深いものがあった。

5月24日も沖繩日和に恵まれ、沖繩戦終焉の地となつた島南部地区の白梅の塔、健児の塔などを巡拝した。学徒兵としてまた従軍看護婦として作戦に協力し軍と運命を共にして、同島特有

のガマ(地下洞窟)で最後を遂げた学徒達の活躍ぶりは、当時中学三年生で同じ年輩に近かつた私達にとり、連日ラヂオから流れる沖繩戦況で報じられて身につまされていただけに痛惜の情切実なものがあった。濠のかたわらに建つ恩師や級友による

ひとすじにくにまもらむとわかうどら
いのちはてにきえりをたださむ
いはまくらかたくもあらむやすらかに
ねむれとぞいのるまなびのともは

の歌碑も風雨に曝され苦むして時の流れが感ぜさせられた。

最後に訪れた南端の平和祈念公園では、各県毎の慰霊碑群の最奥端にある義烈の塔の前で慰霊祭が行われ、同隊で散華された奥山道郎隊長の盟友であり、同碑建立の責任者でもある田中賢一さんから祭文が奏上された。当時の事情を最も良く知る挺進隊関係者として、心情を述べる追悼の言辞は悲愴に



地終焉司令部軍



「義烈」の碑に詣でる

して肺腑をつくものがあり一同肅然とした。
次いですぐ南側の断崖上に建つ「空華の塔」に参拝し、航空特攻の勇士や民間航空士として作戦に参加し殉職された英霊を弔つた。

沖繩戦最後の激戦地跡摩文仁の丘に

建つ黎明の塔は、牛島司令官、長參謀長をはじめ第三十二軍関係者が祀られており、島田知事はじめ沖繩県関係者を祀る島守の塔參道の登口に建てられてあった。

海辺にそそり立つ断崖の上にある塔のすぐ下の崖の中腹には第三十二軍司令部終焉之地の石碑があり司令官自決の壕の中は薄暗く、熾烈な沖繩戦最期の模様が彷彿と想はれ胸に迫るものを感じた。

四日間の戦跡巡拝の旅も恙なく終了し帰途の機内では、航空特攻で慶良間で散華されたという伍井芳夫氏の遺児姉妹と隣席となり、海軍で父が戦死した亡妻と同じ境遇の思い出話は身につきまされるものがあった。

英霊を偲ぶ戦友やご遺族の方々の貴重な体験談に接すると共に、想像をはるかに絶する苛酷な戦場で数ヶ月を闘い散華された軍民の姿にあらためて深い感動を覚えた旅だった。

帰途二時間の空の旅で降り立った本土では、平和な初夏の姿と、相変わらず党利党略の論議に明け暮れている重要な有罪法審議の国会の姿に大きな違和感を感じずにはいられない。

特にこの慰霊行をインターネットのホームページで探索し、アメリカから単身参加した若いヒックマン加代子さ

んは、義烈空挺隊で散華された伯父さんの慰霊に参加し私達の帰国後も読谷に戻って当時の状況を確かめたいとの事だった。

本人の熱意と、日本の特攻の勇士を尊敬し妻に参加をすすめた、かつての敵国アメリカの青年の夫君の心情に深い感銘を覚えた。

この事はかつての妻の父が玉砕した南太平洋のクエゼリン島を訪れた時、米軍基地となっている同島司令官のコックテル大佐が赤い島居を建てて丁重に祀つてある日本軍戦死者の慰霊碑の前で、この孤島で祖国のために勇敢に闘い玉砕した日本軍の姿をアメリカ軍人の教訓にするため島に残されたトーチカ等と共に大切にしている事を聞き、帰国後顧問をしている市遺族会の席上伝えた事があった。

戦後の歳月の流れと共にご遺族の方々も高齢化してゆく中で遺児達の間にも肉親の父兄の犠牲の思い出の風化と平和慣れした安易な世相の中で受難の民族体験忘却の傾向に対する警鐘として今回の体験を語り伝える責任を痛感させられた貴重な慰霊行だった。

お世話になった協会事務局はじめ同行の皆様は心からお礼申し上げます。

5月22日(水)
バスにて万座毛へ、海岸の絶景を眺めた後、金武町鎮魂碑へ、お供えをし、読経をし、各自焼香を済ませる。役場の職員が大切に見守ってくれて保存さ

特攻隊洋上慰霊沖繩

巡拝旅行記

本間 嘉男

今回の巡拝では特攻隊員は勿論、一般戦闘員、住民等全戦没者の慰霊することが出来満足している。

5月21日(火)

那覇空港着後、貸切りバスにて、陸上自衛隊那覇駐屯地へ、沖繩立体模型を見ながらビデオで説明を受ける。

沖繩護国神社へ、立派に改装されている。お払いを受け各自玉串を奉奠し、参拝する。

読谷飛行場へ、義烈空挺隊玉砕の地の塔にお供えをし、読経の後、各自焼香をする。ここで、空挺隊に造詣が深い方の説明をうける。三機飛来し一機が着陸に成功し、敵の心胆を寒からしめ、成果を挙げた後玉砕したとのことです。広大な砂糖黍島の中に立つ慰霊塔は、粗末ではあるが、立派に守られて有難い事です。

れている。

東南植物楽園へ、南方の珍しい植物もある園内を、遊覧バスにて見学、昼食を取る。

安保の丘へ、広大な米国の飛行場を見渡す事ができる。この付近には米軍の家族住宅地が並び、スパーや学校も建てられている。ここは私有地でもあり、問題の起こる所である。

バスで移動、中城湾前では、小雨となり、車中より戦没者に黙祷を捧げる。旧海軍司令部壕跡へ、22年前見学したときと、出入口が変わっているが、面影は残っている。

海軍戦没者慰霊塔を参拝する。



海軍慰霊塔

首里城公園へ、守礼門も朱色に塗り
変わり、首里城も復元される。

付近には32軍司令部の壕がある。以
前入壕したことがあるが、現在は禁止
である。

5月23日(木)

泊港より渡嘉敷港へ、
船上で護国神社の神官により、厳粛
に洋上慰霊祭を行う。

祭壇には、献花とお供えをし、各自
拝礼し、花と酒を洋上に投じ、慰霊す
る。

船もすこし揺れたが無事に終わる。
慶良間諸島も近くに見え、渡嘉敷港に
到着する。

これより先、この戦闘に参加した隊
長の解説により巡拝を続ける。

集団自決の地へ、小高い丘にあり、
お供えと読経の後各自焼香す。

一般住民自決の地である。当時ここ
で生れた方が現在助役として活躍して
いる。時の過ぎるのも早いものです。

白玉の塔へ、戦闘員、住民共に自決
の地である。お供えをし、読経の後各
自焼香を済ませる。当時食糧も底をつ
き悲惨を極めた。

渡嘉敷マリリンレッジへ、かつて戦
争があつた地とは思えない程美しい海
岸を望みながら昼食をとる。



白玉の塔

ここに陸軍海上挺進戦隊の手掘の掩
体壕があり二艇収容可能とのことだ。
戦跡の碑へ、渡嘉敷村役場の近くに
あり、お供えをして各自焼香をする。

役場の職員が守っている。歴史民族資
料館を見学して、渡嘉敷港より泊港へ、
夕食は料亭那覇で郷土料理を楽しむ。

5月24日(金)

バスにて南部戦跡巡りへ、若き学徒
の犠牲となつた、白梅の塔、健児の塔、
ひめゆりの塔を巡拝し冥福を祈る。涙
の止まらないのを覚ゆ。

平和記念公園へ、義烈空挺隊碑の前
で献花、焼香をする。空華の塔に拝礼
し、一元戦闘パイロットの説明を受ける。

黎明の塔へ、牛島司令官の自決の前
の端座の地と言われる。献花、お供え
をして、焼香を済ませる。22年前訪れ
たときと違い、紺碧の海もさらに冴え

渡り緑も鮮かさを増している。英霊よ

安らかに眠り下さい。

泡盛工場を見学し、バスにて最大の
激戦のため、人もなく住宅もない跡地
を通り抜けて那覇空港へ。

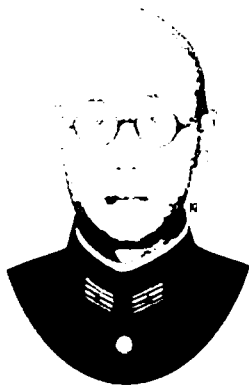
我々平和に暮らすのも、これ等の英
霊等の御陰で、感謝の念で一杯です。
次の世代へ伝えて行きたいです。

今回の巡拝は、世話人の心尽しの計
画と、さすが軍隊の経験の集りて、時
間厳守で、規律正しい行動により全員
無事に巡拝を終わり感謝します。

本間嘉男殿の弟本間俊夫少佐

田中 賢一 記

本間少佐は陸士52期、陸士予科区隊
長のととき船舶兵に転科、海上挺進28戦
隊長、5月3日夜特攻出撃戦死、任大
佐。



終戦時に於ける

特攻隊員の心境

右の標題で座談会を催した。総
員19名、出席者は左記の通り。

陸軍

佐々木 朗 陸士57 航空

吉武登志夫 陸士57 航空

深川 巖 陸士57 航空

小川 武 特操1 航空

森木 基裕 陸士58 航空

藪下 郁男 少飛14 航空

牧 外吉 少飛15 航空

皆本 義博 陸士57 海上挺進

田中 賢一 陸士52 空挺

海軍

今泉 利光 丙飛16 航空

河崎 春美 甲飛13 回天

多賀谷虎雄 甲飛13 回天

奥野 博司 予学4 震洋

荒井 志朗 甲飛13 震洋

海老沢善佐雄 海軍14志 伏龍

飯野 伴七 海兵72 航空

小灘 利春 海兵72 回天

上田恵之助 予学5 震洋

司会

菅原 道熙 陸士61

オブザーバー 最上貞雄理事長

座談会の内容は、次号に掲載する。

「摩文仁の丘の蝶」

ヒックマン加代子

(32歳、陸士57期川守田啓志、遺族)

私の両親が共働きだった為、私は明治生まれの厳格な祖母に育てられまし
た。祖母は27歳の時に夫を病気で亡く
し、それから女手一つで私の父を育て、
その間には家族を病氣(結核)で亡く
した祖母の甥を自分の息子の様に可愛
がって育てたと言います。私が物心つ
いた頃から祖母は、毎日の様にその甥
が戦死したことを涙ながらに話してい
ました。しかし当時の私は、彼がどの
様な人だったのかとか、祖母の苦しみ
や哀しみを何も分かるうともせずに、
「また始まった」とばかりに耳を塞ぐ
ありさまだったのです。

私がこの彼(甥)のことに興味を持
ち始めたのは、アメリカのテレビで当



時のドキュメンタリーを、たまたま見
てからの事なのです。それはミッドウェー
やガ島のもので、真珠湾、東京大空襲、
それから広島・長崎の原爆以外何も知
らなかつた私は、驚いて言葉になりま
せんでした。私の祖母と同じ世代の人
たちが若いときに、日本の為に命をか
けて戦っている姿。それも太平洋の遥
か彼方で。同じ日本人には全く見えま
せんでした。それから、ドキュメンタ
リービデオを買い揃えて見てみると、
今まで私が抱いていた日本(人)の印
象が180度変わったのです。それまでは、
日本人は軟弱なのだと思っていたし、
私は平気で日本が嫌いだと言っていま
した。そのドキュメンタリーの中には、
航空特攻で米艦船に突っ込んでいく、
または撃墜され海に落ちていく飛行機
や、米軍の戦艦の中の海にボツンと浮
かんで生存している日本人兵士が映っ
ており、この戦争とは、特攻とは、日
本人とは何なのか、と考えるようになっ
たのです。そこで、祖母がいつも話し
ていた甥はどの様にして亡くなったの
か、ということをお願いし家族に聞く
と、誰も知らないのではないかという
ような答えが返ってきました。どうし
ても知りたかった私はインターネット
を利用して沢山の方々に問い合わせを
し、そのほとんどの方々から、特に当

協会から多大なる御協力を得て、彼は
「義烈空挺隊」の飛行隊、「第3独立飛
行隊」に所属し奥山・諏訪部両隊長の
乗る飛行機を操縦していたことが分か
ったのです。

当時の祖母の気持ちを考えてと居て
もたつてもいられなくなり、私は是非
一度、彼の亡くなった読谷飛行場へ、
祖母の代わりに行って来なければなら
ないと思うようになりました。この5
月に神繩へ行く計画を立てていたとこ
ろ、当協会の慰霊巡拝旅行が5月にちよ
うど神繩であるということと事務局の
栗原さんより教えていただき、このチャ
ンスを逃がしてはいけないということ
で今回一緒にさせていただきます。

田中さん、最上さん、深川
さんのお話から当時の状況を想像し、
この静かなさとうきび畑の何処かに第
3独立飛行隊、義烈空挺隊の皆さんが
眠っておられるとは信じられない気が
ちでした。私の家族は青森出身ですが、
よくぞこんな遠い神繩まで来て戦った、
さぞ寂しかったのではないかと思い、
当時の祖母や祖母の甥の暮らなどを
考え始めると胸が詰まって、私のこの
思いが彼に届いてくれていたらと願う
のと、ここで亡くなった皆さんに、絶
対皆さんのことを忘れないから安らか
に眠ってくださいと祈るのでした。

義烈空挺隊にまつわる場所はもう一
つ摩文仁の丘にあり、ここには慰霊碑
亡くなった隊員の方々のお名前、それ
から松本武仁さんの描かれた絵等があ
りました。義烈空挺隊の碑の中に入っ
て行くと3匹の黒い蝶がやって来て、
私はとても不思議な気がしました。そ
の他の場所でも沢山の黒い蝶とトンボ
が飛んでおり、まるで英霊達が私達を
迎えてくれているかのようでした。摩

念願の読谷飛行場での慰霊は、旅行
第一日目の午後、どんよりした空の下
で行われました。高速道路と混み合っ
た住宅街を通り抜けると一面のさとう
きび畑になり、真直ぐな道路に入ると
とても立派な建物(読谷村役場)が畑
の中に見え、慰霊碑はその向かいにあ
りました。

文仁の丘から下に見える神繩戦で亡く
なられた方々のお名前が刻まれている
「平和の礎」に向っての石橋一歌さん
の歌。私は非常に感動し、日本人に生
まれて本当によかったと心から思える
瞬間でした。

旅行第3日目の洋上慰霊は今にも降り出しそうな雨雲の下、強風と激しい波のなか、那覇から渡嘉敷島へと進む船の上で行われました。私は激しい風と強い波で揺れに揺れる船に振り落とされぬように必死に立ちながら慶良間列島の見える海を眺め、こんな強風のなか小さい飛行機を、こんな強い波のなか特攻艇を操縦してここまでやって来たのだろうかなどと考え、映像で見た沢山の米艦船で真っ黒に見える海や、対空砲火や遊撃で花火の後のような空を想像し、本当に私はその場所に居るのだろうか、同船の高校生連のはしゃぐ声を聞きながら考えていました。長い汽笛が鳴った後、慰霊祭が始まりました。私は日本を守ってくれて有難う、皆さんのことは絶対に忘れませんと心で呟きながら菊の花を海に落としました。この慰霊のなかで、皆本さんの「この海で亡くなられた米兵隊の皆さんにも慰霊を」という言葉に感動し、米兵隊の皆さんにも手を合わせました。そしてこの約20分の慰霊の始終をじっと真剣に見ている高校生の姿を見て、私は非常に嬉しく思ったのです。

特攻とは航空特攻だけだと、私はこの調査を始めるまで思っていました。震洋隊という名前は聞いたことがあったけれども、どのような特攻だったの

かは旅行2日目、金武町の慰霊碑の前に来るまで知りませんでした。これを書いているたった今、こちら（アメリカ）ではテレビで特攻の特集が放映されており、震洋隊についても説明されました。この旅行の前には回天の特集で河崎さんのお姿をアメリカのテレビで見せておりました。日本でもこの様な番組が増えることを私は強く望みます。

今回、沖繩で慰霊が出来たことは勿論ですが、当時を実際に生きてこられた、実際戦場へ行かれた皆様とご一緒できたことが何と言っても、私には一番嬉しく光栄なことでした。本や映像でしか目にしなかったことを、実際皆様から聞くことが出来て私は本当に感動しました。日本の為に亡くなられた、生き残って日本の再建の為に尽された皆様のことを、絶対に忘れてはいけなさと改めて思っております。他にも聞いておくべきことがあったなど後悔も沢山残っていますが、今回の旅行は生涯忘れられない思い出だけではなく、これからの私の力の源になると確信しております。この様な機会に恵まれたことに深く感謝し、おつき合いたただいた参加者全員の皆様と当協会に心よりお礼申しあげます。

一番機搭乗者名

奥山中隊	大尉	奥山道郎	三重
	少尉	岡部創	重崎
	曹長	阿部忠秋	宮本
	曹長	尾見勢三	榎木
	軍曹	北島信利	北海道
	軍曹	酒井武行	長崎
	軍曹	菅野敏威	福島
	軍曹	金山清治	千葉
	伍長	高橋房治	茨城
	伍長	大月松雄	神奈川
第三独立飛行隊	大尉	諏訪部忠一	青森
	少尉	川守田啓志	青森
	少尉	小林眞吾	新潟
	軍曹	長瀬嘉男	兵庫



滑走路に向かう1番機



摩文仁の丘から眺める平和の礎



下段左：川守田啓志、中：父、右：祖母。昭和15年頃

特攻隊洋上慰靈に参加して

白田 智子

(伍井芳夫大尉次女)

第23振武隊(99襲) 伍井大尉
(少候20期) 以下4名4月1日知
覽発進沖繩近海の敵艦に突入

泊港よりフェリーにて渡嘉敷港の途中船上で沖繩護国神社の宮司様の祝詞を頂き、船上の慰霊台には海の幸、山の幸そして花束が上がり大変立派な祭壇となっております。フェリーの汽笛を合図に黙祷し、また菊の花を父の側まで届けと思うが船が揺れ風が強くなるように投げる事ができなかったのが少し心残りです。お父さん今まで一番近い所にいますよ、私は沖繩の海は父のいる場所なのです。今回参加出来て本当に良かったと思います。

私は沖繩は10年前から年に一度か二度行きます。6月23日の慰霊の日は遺族として平和行進、糸満小学校から平和祈念公園まで10キロ歩きそのまま追悼式に参列致します。今年は前夜祭で平和の鐘をつきました。全国から7名の代表の一人でした。沖繩で戦死した遺児と決められているようです、私は今年の鐘は特攻隊の海で眠る戦死者に

届けと力一杯打ちましたよ、でも今年には平和祈念堂の裏庭に蛍がいなかった、昨年は沢山の蛍が飛んでいましたのに蛍を見付けることができなかったのが残念でした。

1か月前に摩文仁の丘の空華の塔を初めてお参りしました。私は探していましたが、航空で戦死した英霊の方々を祭る碑を嬉しかったです。これからお参りします。私は今回も皆様とお参りした空華の塔の前で手を合わせて塔婆が上がっております。1か月前は梅雨で塔婆が見えます。

したが今日の海はエメラルド色の暑い夏らしい海でした。そして平和の礎のみえる丘で一歌様が御国のためと歌吟されました。礎の中にしみわたるお歌でした。なぜか私は涙をながしてしまいました。一歌様これが心からの慰霊なのかもしれませんね。礎をみるたびこれからも思いだすでしょう、洋上慰霊では大変皆様にお世話になりました。これからもよろしく願いいたします。



花や酒を海に投げる



礎 全戦没者の氏名が彫んである

人世の総決算
何ぞ謂ふこと無
伍井大尉圖

沖繩巡拝旅行に参加して

深川 巖

一、平成10年57期生総会を沖繩で行い、その際旧海軍司令部壕跡を見学したが、入口案内板の文面に「軍は県民を駆り出し」とあり、その偏向性を感じたものだが今回は右の文言は無く、「県民は軍の召集に応じ」特に子女は進んで」とあった。沖繩サミットを含めこの五年間に正常になったと思った。

一、特攻散華、海に沈む。激戦地の慶良間列島沖での洋上慰霊祭は素晴らしかった。

一、特攻協会のホームページで知ったという米国アリゾナ州フロリダにお住いのヒックマン加代子さんが遺族会員として参加された。加代子さんの父上の従兄弟が故川守田啓志君（57期・陸軍少佐・義烈空挺隊輸送・沖繩北飛行場に強行着陸）という縁である。5月21日沖繩空港で合流、24日迄我々と終始同一行動であった。

一、巡拝は読谷の北飛行場跡から始まり、加代子さんからお花が捧げられ、香煙は独経を包んだ。白い木柱の質素

な碑ではあるが、前回（平成10年）より碑前は整地され草月が植え込まれていた。旧滑走路を辿り次に向かった。

一、残念だったことは、右の地点を、沖繩ツーリスト側が特定出来なかったことである。

一、総力戦であった沖繩を改めて認識した。健児之塔・ひめゆりの塔・海軍司令部跡・摩文仁の丘・読谷北飛行場跡地・渡嘉敷島集団自決の跡・碑等を巡拝して、まさしく県民は軍の召集に応じ、特に子女は進んで軍務を補助し、全島一丸となつての総力戦であったことを痛感した。沖繩は合掌しても合掌しても哀悼すべきない戦場であった。

この事実をどの様に受け止めるか、人夫々の感慨がある。私は次の様に思う。

戦争は無いに超したことはないが、力なくて戦争を回避できない。印・パの拮抗状態も力のバランスの上になり立ち、戦争回避への努力の時間も生れている。我が国は有事対応を整備し、米国との同盟関係の充実を図らねばならない。

一、特攻についてどう思いますか、特攻隊になった時の心境は如何でしたか、

このことはよく聞かれた。今年になって、アメリカ人・ハンガリー人からインタビューを受けた。その方々も同じ様な質問をされるが、ちょっと違う、というのは、心の壁を見るような、ちまちましたところが無い。彼等が対談の中から見出したのは、日本人の心、つまり大和魂である。そのような気がする。

一、沖繩第32軍終焉の地摩文仁の丘には、航空関係戦没者慰霊のために建てられた空華之塔の傍らに、飛行第19戦隊特攻之碑が建っている。碑前で、元飛行第19戦隊 高原忠敏氏（56期）は戦隊から特攻出撃した渡部國臣少尉（57期）の秘話を初めて話された。

一 渡辺國臣君が特攻で出てゆくその朝「高原さん ちょっと、さびしいです」と言って、にっこりして敬礼しました。その顔の美しかったこと、今でも忘れられません。

昭和20年4月22日 渡部少尉は何時もの黒いマフラーを巻いて宜蘭（台湾）発進、慶良間湾内の敵艦船に突入し戦死。

合掌

5月23日当日フェリー乗船洋上慰霊祭の行われる日である。沖繩本島那覇泊港に碇泊中の慶良間丸に9時乗船、

沖繩慶良間沖特攻隊 戦没者洋上慰霊

飯野 伴七

此の海域は陸海軍の航空機が九州各地又台湾からも発進して、集中して沖合の艦船に攻撃をかけた戦果も上げ、米軍をして心臓を寒からしめた処である。今回の沖繩戦跡巡拝旅行の最たる法要の一つであった。

慰霊は洋上に出て船上で行うので道路が通じて居る陸上とは自ずと計画が異なるのである。海上は海軍と言う意識からも何かと研究しようとする東京の沖繩案内所・現地沖繩業者者に当たって見たが小舟では危険不案・安全大型では経済的に計画が成り立たず頭を抱えてしまった。折も折本計画に関係のある幹事が集合検討の会がありその席上現地に顔の利く皆本氏の提案あり、現地渡嘉敷村宮の定期フェリーが、船長も引受け海上一廻り位は儀式の為出来るだろう由、又船上に護国神社宮司が祭壇を設けて護宮するとの状況報告があり（既に一回体験済み）誠に救われ肩の荷が下りた次第であった。

供物、花等も船積した。今航海に沖繩の高校生四〇〇名乗船満員となり急に賑やかになる。但し此の為途中一回周する余裕無しと船長から断わられた。

10時出帆沖に出ると北西の風が、船の速力と合成五、六米、波頭も時々白く「ウネリ」に船は大きく揺れる。神棚は神社側と地元協力者で整えられ10時30分汽笛一声の船体が揺れて足元の危い状況で、危険を犯して供物神饌が捧げられ禰宜が祝詞を上げた。

次いで会員小久保僧侶が仏式の読経を捧げ、これも体を足をふんばつての大頑張りとなった。ご遺族の上方司令部同期生の波間に彷彿たる中に清酒を捧げ注ぎ、又特に供物を捧げた。私も同期生の妹さんより預った観音經の写経を隅に重しをつけ風に乗せて波頭に上手く拵げて名前を大声で呼んで捧げた。環境規制で木の卒塔婆は奉下は中止された。かくて三十分も続いた式典の様子はNHKで取材撮影してくれ、本島側に帰着後、午後5時半のNHKニュースに放映され洋上慰霊の憶いを一層強くした。

11時頃には風浪静かになり渡嘉敷港に近づいて来たのであるが、11時10分渡嘉敷港に入港しミニバス二台に分乗し島内陸上の戦跡地巡拝に向かった。後日談、5月24日午前5時のNHK

全国ニュースに放映され東京で視聴された方が、良くやって下さいましたと報告がありました。



御霊に捧げる品々を海に投ず

沖繩慰霊巡拝旅行参加記

木村 元正

旅行は当初の計画により順調に行われたが、その中で特に印象深く、心に残ったことを述べたい。

その一つは読谷飛行場跡にある義烈空挺隊の碑参拝であった。今は米軍管理下にあつて、目に付くものは何もない原っぱという感じである。当時のことについて深い知識はないが、眼を閉じると義烈空挺隊の勇士が、この飛行場に強行着陸し、制圧した情景が浮かんで来たのである。獅子奮迅の戦いの末全員玉砕。碑前で般若心経を、同行の小久保隆福師先導により、全員で唱和した。

その二は洋上慰霊である。5月23日(土)当日、天気晴朗なれど波高く、村宮フェリーの船上は大きな揺れであった。沖繩護国神社加治宮司の司式により厳そかに祭事は進められたが、宮司が祝詞を奏上する時、不安定なため付き添いの知念朝陸氏が宮司の左腿を抱えて、事無きを得た。その後、持参した花束、お神酒、さらに会員の野崎徳子さんがご奉仕頂いた写経を海へ夫々流し、海に空に散華されたご英霊へ哀悼の誠を奉げたのであった。



海に花など投げる



海行かば合唱

ここでは陸士56期姜沼俊雄氏の提案で陸士61期菅原道照氏リードにより「海ゆかば」を全員で斉唱した。これは良かった。特攻隊勇士に思いを馳せ、胸が一杯になった。

その三は渡嘉敷島への巡拝である。この島は航空特攻の他、④の基地でもあり、軍民挙げての激戦地であったと聞く。⑤については57期皆本義博氏の懇切なるお話があり、その後、島内各所の巡拝となった。中でも胸打たれる思いがしたのは島民集団自決の碑（白玉の塔）ならびに自決場所への訪問であった。沖縄戦の細部については、殆ど何も知らないが、このような事実があったことを知らない人が多々いるであろう。当時の島民が敵の捕虜となることを潔しとせず、親子兄弟あるいは姉妹が互いに手を掛け合って命を絶つたことを思うと、語るべき言葉もない。暗澹たる思いである。

最終日24日は摩文仁の丘を巡拝したが、各県の慰霊碑に拝礼し、黎明の塔、牛島閣下、長参謀長自決の場所にも拝礼した。最後にひと言、この巡拝旅行には義烈空挺隊勇士陸士57期川守田啓志中尉の姪ヒックマン加代子さんが通々アメリカはフロリダから参加され川守田中尉の戦死された読谷の義烈空挺隊慰霊碑に参拝されたことを添える。

沖縄慰霊行雑感

菅原 道照

一、洋上慰霊祭の時、祭壇の設けられた後甲板の右舷側で、修学旅行の男子高校生三人が祭典に終始立会っていた。船内を歩き廻っていて祭壇がしつらえられつつあるのを見て、好奇心から足を止められたのであるが、強風で烈しくフェリーが揺れる中、ずっと立ち続けていた。

宮司の祝言は風に遮ぎられて良く聞こえなかったであろうし、聞こえたとしてもその内容は彼等には難解であったろう。予め乗るフェリーで洋上慰霊祭が行われると聞かされてはいなかったであろう彼等が、どの程度慰霊祭を理解し、又涙しつつ酒を海に注ぎ、生花を投ずる参加者の姿を見て、どの様な感じを抱いたのか、祭典終了時に直接聞いておくべきであったと、今になって残念に思うこと頻りである。

一、今回の慰霊行にヒックマン加代子さんが、遙々米国から参加されることは打合会の席上知ったが、沖縄空港でもう一人の女性と一緒に、大阪の大井博子さん。お互い「メル友」で今回が初対面、大井さんがヒックマンさんの

メールで知って、自分も是非と急抱参加されたとのことで、1丁時代、我々が思いもよらなかった情報伝達手段による交流が、日常化していることを目の当りにして、パソコンを未だ操作したことがなく、つくづく世に取り残されつつある己を痛感させられた次第である。

第一日の夕食、同室の野口さんと食事をした時、隣の机で彼女等二人で食事中であった。食後何となく話を交わし、ヒックマンさんのお父上の従兄弟の川守田啓志さん（航士57期3独飛）が、義烈空挺隊と共に沖縄で戦死されていることで、かねがね関心を持っていた処に、特攻協会のホームページで知って慰霊行参加を申込んだということを知り、色々と感銘を覚えた。

翌日彼女から、菅原さんのお父様と思われる方が写っている写真コピーがある、と話し掛けられ、それなら又今夜一緒に食事してその時に、ということになった。

そこで示されたコピー、正に父が写っている。而もその写真は小生が初めて目にするものであった。驚くと共に遠く日本と反対側のフロリダ州タンパに住んでいて、特攻に並々ならぬ関心を持ち調査を続けている彼女の態度には、心底感服した次第である。

何故大東亜戦争に突入したのかという疑問に突当てて、現在満州事変迄歴史を溯ったとのことで、少なくとも明治維新前の幕末期からの近現代史をじっくり勉強して下さい、と申し上げた。

士官学校では4期先輩の57期、少年飛行兵15期で特攻出撃された方々の中で、最若年は小生と同一年、一方の己はひよこにもならない受精卵（昭和20年7月に航空要員と決定）の身、大きなことは言えないが、色々と思う処を彼女達に述べたけれども、川守田さんの同期生であり御自身待機特攻隊長であった。深川巖さんの話をこそ充分に聞かせるべきであったと今後悔している処である。

一、慰霊行最終日は、偕行社の教科書対策特別委員会出席の為に離脱せざるを得なかったことは、返す返すも残念なことでありました。然し乍ら、東京裁判史観に基づく歴史教科書の改革を目指すことは、特攻戦士を含めた全戦没者の御霊にお応えすることの、極めて重要な一環であると考えて、委員一同努力中であることを、慰霊行参加者の皆様にお伝え申し上げます。

沖繩慰靈の旅をして

海軍十九志 穴山 正司

羽田空港の集合場所に行きますと、昨年、旅行の折の見慣れた顔振れが見え、一別以来の挨拶や三泊四日の旅行の事を託しつつ、機上の人と成って沖繩空港に降り立ちました。

食事後はバスに搭乗して陸上自衛隊基地内に入り、昭和20年4月からの沖繩戦の、状況の説明を広報室員の説明で聞くが、目の前には沖繩本島の縮尺された地図と、彼我の戦況の状況が豆電球で表示されて、当時の陸上戦での生々しい民間人全てを上げての、戦況を一時間程説明され聞き入った。

有史以来日本国土内での地上戦は、沖繩県民を含めて四月に、米軍上陸から六月二十三日事実上の終結を見る迄に、二十万余の戦没者を生じた。

この間には九州各地は基よりあらゆる処からの出撃は、飛行機、船舶等での特攻をして全ての機智を使つての戦いは、壮絶のもので表現以上の過酷だった。其の中でも県民達の協力は筆舌に尽くし難く、老いも若きも必勝の一念を基に、戦火の中で山に駆け上がり又、洞窟の中で戦傷者の看護に尽くした女学生達の、献身的な奮闘振りは

数多くの犠牲者を見るに至った。

兵隊達は其の為戦いでもあるからと本質的に見れば、致し方無いと割り切れるものだが本来は銃後の守りでもある筈の民間人が、矢表に立った戦場で戦火の中を、食住さえ無い戦場で乳飲み子や、子供達を抱えた母親の心情を思うと、渡嘉敷島の祈念碑を拝礼した折は、説明者の言葉一つ一つを聴きつつ、涙なくしては聞けない一場面でした。

同じ様に数多くの記念碑を拝礼させて頂きましたが、義烈空挺鎮魂碑、金武鎮魂碑、白梅の塔、健児の塔 各県人の慰靈碑、空華之塔、そして二十万余の散華者一同を刻名した礎、ひめゆり記念館等々で枚挙に上がる数々の全ての碑は、戦場の名残の尊い英霊達の、墓名碑でもある処でしょう。

生ある限り私達に課せられたこれら碑の保存維持は当然で、限りある機会だが英霊の為に、冥福を祈り続ける参拝をと、私は思つて参りました。

一度より二度、そして三回目の巡拝の旅でもあって、顔見知りの方との本当に気さくな旅で、一夜那覇市内の見物の散策も致しました。辛かった過去もありましたでしょうが、生きて居ればこそ楽しい旅もありで、お互いに元氣こそが何よりの宝です、又の旅行

で会える事を楽しみとして、ご自愛を頂きます事を祈念申し上げまして、拙い文章を止めさせて頂きます。

特攻会報42〜51号

総目録

靖国神社における特攻合同慰靈祭

号 年 月 頁

43 (12・5) 1 祭典

47 (13・5) 1 祭典

51 (14・5) 1 祭典

世田谷特攻観音年次法要

45 (12・1) 1 年次法要

28 献吟関連

49 (13・11) 1 年次法要

各地の慰靈行事

44 (12・8) 17 ①慰靈祭

18 鹿屋特攻基地慰靈祭

20 知覧特攻基地慰靈祭

2 川南護国神社例祭

9 大東亜戦争忠霊顕彰

五十九年祭

17 大津島に於ける回天

追悼式典

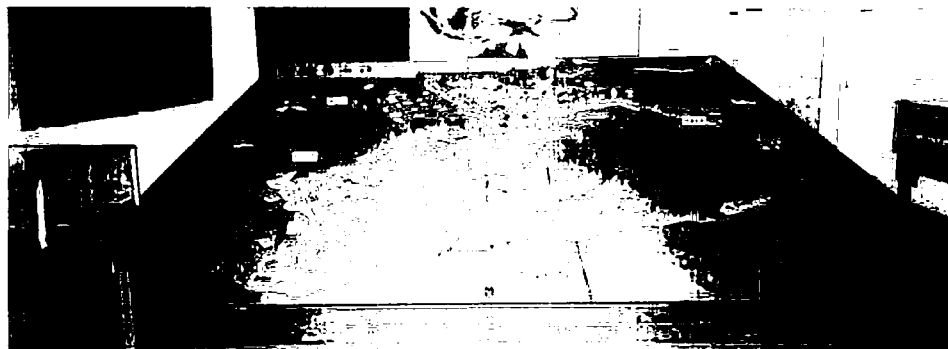
50 (14・2) 14 震洋特攻隊の慰靈句

碑建立

航空特攻(対艦船)

43 (12・5) 24 騎兵出身の特攻隊員

②



沖繩作戦の説明板

44 (12・8)	19	騎兵出身の特攻隊員	46 (13・2)	26	義烈空挺隊の遺墨②	46 (13・2)	21	回天⑦伊東修	戦没者		
45 (12・11)	3	③ 特操出身者は語る	14	14	義烈空挺隊の遺品に憶う	47 (13・5)	19	空挺②白井恒春中佐	特 潜		
	23	井上二飛曹の出撃前夜	18	18	未発に終わった滑空特攻	48 (13・8)	24	回天⑧小林富三雄	50 (14・2)	4	特殊潜航艇真珠湾攻撃
48 (13・8)	26	誇高き愛機屠童の得た片道切符	24	24	高千穂降下部隊を讃える歌	50 (14・2)	23	回天⑨河合不死男			
	3	桜花特攻についての座談会⑧	47 (13・5)	9	陸軍滑空部隊の始めから終まで	44 (12・8)	3	陸軍海上挺進	遺書・遺墨・遺詠		
49 (13・11)	3	桜花特攻についての座談会⑨	16	16	義烈空挺隊の起用が決る迄	44 (12・8)	3	生残り特攻隊員の心境①と震洋	43 (12・5)	5	遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情
	9	戦史叢書にみる第一神風隊	19	19	忘れ難人たち	48 (13・8)	20	海上挺進部隊創設の由来	44 (12・8)	13	右の記事の読後感
	18	特攻機突入 西野少佐手記	51 (14・5)	28	読谷飛行場跡で義烈隊を偲ぶ	51 (14・5)	38	渡嘉敷と海上挺進戦隊	45 (12・11)	13	特攻隊員の手紙②
51 (14・5)	15	沖繩作戦航空特攻機数	30	30	義烈空挺隊概説	40	40	沖繩戦の陸軍海上挺進戦隊	46 (13・2)	3	特攻隊員の日記⑥
	16	沖繩に散った特操一期の戦友①	33	33	義烈の碑、建碑の由来	40	40	戦没者遺書遺詠等の伝承	46 (13・2)	3	特攻隊員の手紙②
	27	沖繩中飛行場発進の航空特攻	44 (12・8)	3	生残特攻隊員の心境①と震洋	37	37	沖繩戦における震洋	47 (13・5)	8	感動を覚えた一文
	27	航空特攻	44 (12・8)	3	回天	51 (14・5)	37	沖繩戦における震洋	47 (13・5)	8	感動を覚えた一文
航空特攻(対B-29基地)	48 (13・8)	3	3	3	忘れ難い人についてはその項に掲載してある。	44 (12・8)	16	書評「回天その青春群像」	49 (13・11)	21	特攻隊員の人を恋うる歌③
50 (14・2)	18	第一御桶隊解散に困んで	49 (13・11)	3	桜花特攻について②	44 (12・8)	16	書評「回天その青春群像」	22	22	特攻戦死した人達の文集
空 挺	43 (12・5)	26	43 (12・5)	21	忘れ難い人	47 (13・5)	3	回天秘話 第二十三	詩 歌		
43 (12・5)	26	織田信長の故事と義烈空挺隊	43 (12・5)	21	忘れ難い人	47 (13・5)	3	回天秘話 第二十三	詩 歌		
45 (12・11)	18	董空挺隊始末記	44 (12・8)	15	回天⑥池淵信夫	50 (14・2)	7	在米回天探査の旅	43 (12・5)	1	特攻隊追悼式に臨み
	44 (12・8)	15	44 (12・8)	15	回天⑥池淵信夫	51 (14・5)	42	沖繩方面の回天関係	43 (12・5)	1	特攻隊追悼式に臨み
	43 (12・5)	21	43 (12・5)	21	吉本健太郎	47 (13・5)	3	回天秘話 第二十三	43 (12・5)	1	特攻隊追悼式に臨み
	47 (13・5)	21	47 (13・5)	21	吉本健太郎	47 (13・5)	3	回天秘話 第二十三	43 (12・5)	1	特攻隊追悼式に臨み
	50 (14・2)	7	50 (14・2)	7	渡辺幸三	50 (14・2)	7	在米回天探査の旅	43 (12・5)	1	特攻隊追悼式に臨み
	51 (14・5)	42	51 (14・5)	42	渡辺幸三	50 (14・2)	7	在米回天探査の旅	43 (12・5)	1	特攻隊追悼式に臨み
	51 (14・5)	42	51 (14・5)	42	渡辺幸三	50 (14・2)	7	在米回天探査の旅	43 (12・5)	1	特攻隊追悼式に臨み

